

A lternative S ystems S tudy B ulletin

第7卷第2号
(1999年6月15日発行)

目 次

武田桂二郎 論

『社会システム研究』創刊号について

編集人 境 毅

連絡先 〒600-8691 京都市下京区東塩小路町 京都中郵私書箱169号
貿易研究会

会 費 正会員 : 年間1口 10万円
賛助会員 : 年間1口 3万円
購読会員 : 年間1口 1万円

会費振込先 (郵便振替) (口座名) 資本論研究会
(口座番号) 01090-5-67283

武田桂二郎論

解題

今回は新しい社会運動の原理の追求というテーマにそって、「武田桂二郎論」を掲載します。武田さんはグリーンコープ連合結成の立役者の1人であり、遺稿集を拝見する限りでは、私にとって敬愛すべき人物です。しかし、谷川雁同様の文学的文章を解きほぐすのに苦勞しました。

生協運動は閉じられた運動という性格があり、外部からはその実情をうかがい知ることは困難です。しかし武田さんは一貫して運動を外に開こうとしてこられたのでしょう。『共生』（遺稿集）を読めばグリーンコープの最も大切なことが部外者の私にも伝わってきました。それで「武田桂二郎」論は私のグリーンコープ論でもありますが、しかし、当事者からすれば的はずれな見解を展開しているかも知れません。この点お含み下さい。

なお、全共闘運動体験者やそれに興味をお持ちの方は第1章を精読し、不足であれば、『伝習館・複数の母たち』（三一新書）を手にとって下さい。数ある全共闘論のうちの最上のものがここにはあります。次に、生協運動に興味のある方は第5章だけでよいですから目を通して下さい。武田さんの遺稿集『共生』は非売品ですのでなるべく引用を多くしてあります。元気な生協グリーンコープの一つの側面にふれることができるでしょう。第3章、第4章は読者に理解していただけるようには書いていません。しかしここに新しい社会運動の原理が含まれていますので、別の機会に再提起したいと考えています。

第1章 伝習館闘争の時代

第1節 「伝習館・自立闘争宣言」

1) 伝習館闘争の歴史的位罜

伝習館闘争を地域で受けとめ、闘った武田桂二郎の思想を見ていく前に、伝習館闘争の歴史的位罜を確定すると

ころから始めよう。

闘争の全体像を描く余裕はないが、闘争宣言の日付が1970年6月6日、そして、自立闘争宣言の日付が同年11月29日とある。この時期は70年安保闘争が敗北し、社・共両党や総評の反対運動が終了したものの、全共闘、反戦青年委員会や、武装闘争を指向した部隊の闘争は継続されていた。権力に対

する闘争の終息が大衆的に確認されたのは、恐らく71年に連合赤軍の肅正が明らかにされた時点だったろう。70年安保闘争が、68年10月8日羽田空港での山崎君虐殺を契機に大衆的昂揚が始まったことを考慮すれば、伝習館闘争はこの大衆運動が急速に終結にむかっていた時期に開始されたのであった。

次に伝習館闘争は全共闘運動の思想を継承している。このことは「自立」の提起や「関係の構造そのものを変革」という運動方針や、自己の教師としての「犯罪性」をどこまで自己に拒絶できるか、といった伝習館闘争の基本思想のなかに確認できる。思えば、「自己否定」「関係の革命」「自立と連帯」が全共闘の思想だった。

いまこの伝習館闘争の歴史的位置をふまえたうえで、「伝習館・自立闘争宣言」から、武田の思想につながる問題提起を拾い出してみよう。

2) 「自立闘争宣言」

「自立闘争宣言」の作成には武田も深く関与していると思われる。というのも、「言語革命」の思想がすでにここに見られるからである。

「われわれは生活によって連帯するのではなく、われわれが生活をとおして創出するフィクションによって連帯します。生活からフィクションを媒介するのは想像力であり、相互に自律しつつ他律しあう生活と想像力の関係にお

いて、生活の自立性を必然化するのが自然史であり、想像力の自律性を自然化するのが思想であります。連帯とはすぐれて思想の闘いにほかなりません。」(『伝習館・自立闘争宣言』三一新書、28頁)

この言葉は60年安保・三池闘争につぐ大衆的昂揚をもたらした70年安保闘争の敗北と大衆運動の後退局面という伝習館闘争の歴史的位置をふまえて理解されねばならない。大衆運動が昂揚に向かっている時代なら、生活で連帯が可能であり、運動で連帯が可能だったろう。しかし運動の昂揚が去ってしまった局面で、生活において人々は多極化し、運動には背を向けてしまっている。このような時期に闘いを継続しようとするれば、組織力を頼めないとすれば、思想の力しか残されてはいなかった。そして、この思想の力を紡ぎ出す方法について「大衆の状況への下降」ということが提起されている。

「旧左翼の体制化と総評の右翼解体への傾向は、いうまでもなく、これらの状況をつらぬく陽音のリズムを陰音のリズムを媒介として反体制化する言語=文体の欠落によってもたらされたものです。いわゆる新左翼ないし反戦派に属する人たちが、たしかに或る時点まで、現実の闘いには敗退しながら、意識面において広汎な大衆的影響を獲ち取ってきたのは、彼らがこの二つのリズムを一定程度に媒介しうる新

しい感性の論理に恵まれていたからであり、それが大衆のかくれた感性のヒダのひとつにふれえたからであります。しかし、感性の論理はただちに言語=文体ではありません。新左翼ないし反戦派に属する一部の人には、ラディカルの意味をたえず大衆の原意識に還元し、たえず大衆の原意識と現意識の対立過程のなかで捉えなおし、その対立の止揚過程を権力支配から奪取することによって、想意識の革命的疎外態である革命的言語=文体を着実に人民内部に創出してくという、語の真の意味における状況への弁証法、すなわち人類史と人間史の対立を止揚する弁証法を欠いたため、その影響が大衆の意識にようやく定着していくにつれて、かえって大衆から離反していく傾向を深めています。……

もちろん、その反面において、一部の新左翼ないし反戦派の流れに属する人々は、これらの傾向の底を流れる人類史の構造を鋭く見つけ、新しい自己自身の言語=文体を求めて、さらにふかく大衆の状況へ下降をはじめました。そして、そこに早くから下降していた旧左翼少数派の人々、むしろ旧左翼にすら属さなかった人々との新しい結合を獲得しつつあります。われわれは、このようにして左翼における新旧の概念規定が大衆的に止揚されていく事実の中に、新しい大衆発見・大衆創造のひとつの典型を見ることができま

運動が大衆運動として展開しえない時期に革命の意志を持続させていく方法として「大衆の状況への下降」が打ち出され、しかも思想的課題としては人類史と人間史の対立を止揚する弁証法があげられている。

あと自立宣言の末尾には四つの任務がかかげられ、その三項目に柳下村塾の建設と「教育における新しい人間関係を実践的に模索」(37頁)することが述べられ、ここで「下からの大衆発見・大衆創造の場としての地域論=社会構造論を完成」(37頁)することが約束されている。

この柳下村塾については、弁護士として闘争にかかわった倉田令二郎が述べているところによれば、武田が自宅を改築し、託児所、若衆宿、老人宿、学習室によって構成された地域の拠点で、1972年5月に設立されている。そして託児所設立後約1年半の間の経過をまとめたものが『伝習館・複数の母たち』(三一新書)であり、これに収録されている「柳下村塾、内化の思想」が武田の思想の全体像を明らかにしている。つぎにこの文書にもとづき、武田の思想をたどってみよう。

第2節 内化の思想

1) 言語革命

武田の思想は論理的ではない。その原因は対象をそれとして固定し、それを分析していく、という方法をとって

はいないことによる。武田にとって論じている対象は男であり、女であり、また時間であり、空間なのだが、それらは実は「内化の思想」を語る道具だてなのだ。

武田によれば「革命は一貫して言語革命として遂行される」(『伝習館・複数の母たち』三一新書、42頁)ものだという。とすれば、武田が発する言語は「革命的に自立」(24頁)した言語だということになる。だからわれわれはそれを体制言語のようなとらわれた言語として受けとめるのではなく、その言語がどのような革命を構想しているかということに想像力を働かせてみる必要がある。

2) 関係の問いなおし

武田は伝習館闘争を通してかかわってきた党派や運動体やイデオロギーに対して批判したうえで、自らの闘いを関係を問いなおすというところに据えている。世間で分類されている政治闘争や労働運動や市民運動といった区分に異和感を表明しつつ、自らを生活者と位置づけ、伝習館の闘争との関連で、この関係の問いなおしを次のように位置づけている。

「〈伝習館〉は〈受験体制〉であり、〈受験体制〉は〈天皇制〉であるというただその一点において、三教師はわたしたち生活者をつらぬいたのである。かれらが〈受験体制〉の中の教師と生徒との関係を問いなおすことによって、

〈教育〉そのものを問いなおしていったのは、わたしたちに〈生活〉の中の親と子、夫と妻、その他あれこれの関係を問いかえすことによって、〈生活〉そのものを問いかえせと迫ることであった。それがまっしぐらに〈天皇制〉のなかの〈国家〉と〈社会〉の関係を問いただす共同作業につながっていったのは、〈生活〉の中にこそ〈政治〉と〈労働〉をとらえかえす視点があったからである。」(12頁)

生活のなかのあれこれの関係を問いなおし、この視点から武田の言語は発せられている。「内化の思想」とは、この問いなおしの武器なのだ。

3) 政治革命と社会革命

武田が「内化の思想」をかかげたのは、関係の問いなおしに自足することを回避していく、という意義をもっていった。もともと武田がこのテーマにとり組んだのは、従来の左翼思想が国家と社会の関係を根本的に見ていず、また直面している「移動期が人間連帯の再編過程である」(13頁)という認識があったからだった。

そこで武田は「社会共同体レベルにおける社会革命—経済的・身体的拘束およびそれが外化する社会幻想からの解放—と、国家共同体レベルにおける政治革命—法的・イデオロギー的拘束およびそれが外化する国家幻想からの解放—との相互媒介関係において」(14頁)闘うことを構想している。

その際に人々を捉えている幻想を形成していく過程を貫く論理を〈外化の論理〉にとらえ、これに〈内化の論理〉を対置するところから運動を出発させたものが「内化の思想」だった。

4) 日常性と非日常性

ではこの「内化の思想」の発端はどこにあったのか。武田は社会と国家の関係を、「〈日常性〉の二重構造—〈日常性〉の中の〈日常性〉と〈非日常性〉との対立」(17頁)と捉え、この日常性の深淵にある理不尽な暴力的な本質としてある非日常性をあばき出すものとしてすぐれた闘いを位置づける。このあばき出されたものも、いずれ日常性の引力にひきもどされて無明の闇にかえるがしかし、残像は業火となって残る。人類の文明史2000年にわたって積もり積もった業火が「市民社会の腐食部分を焼きつくして、焦土によく人間連帯を回復しうるか」(18頁)という見地から「人類史を見きらねば現代は見えてこない」(24頁)という基礎視座が据えられる。2000年間に積もった業火を全て集めて一つの力にしようというわけである。これが武田が人類史にこだわる根拠となっている。

「〈人類史〉はいつも〈百姓〉の顔をしている。」(26頁)百姓は数千年の時間を耐えてきていることで無表情となっているが、これは時間を内化しているのではないか、60年代半ばに武田はこのことに気づき、「内化という言

葉がわたしの頭にはじめて浮」(27頁)かぶ。

武田の内化とは、何よりも「時間の内化」であった。

第3節 都市と村との連帯

1) 村と都市

武田は解体しつつある村、人と物資を売りつづける関係からついに一度も自立することのなかった村を「じつは子を生子、子を売りつづけてきた母そのものにほかならない」(29頁)と見ている。村が母のイメージで捉えられとすれば、村の解体とは、「子を売る母から身を売る母への移行」(30頁)となる。

ところで都市と村の間には、「村内部の移動と村から都市への移動、都市内部の移動とその村への逆立という移動の四コース」(31頁)があるが、このからみ具合を決定するものは「それぞれの階級と階層を外化しながらその受容力を決定していく生産力の展開と、その意識的・理論的反映である生産力論としての移動論である」(31頁)が、ここで注意しておくべき点は「村はこのような移動を通して都市を外化していくとき、つねに都市が都市になり切れない部分を頑強に補強しつづけてきた」(31頁)ことである。

だから自然村としての村の解体とは、「村全体が身売りに転じたということであり、それは必然的に都市それ

自身の解体を意味してやまない。」(31～2頁)「このように、都市による村の破壊は同時に村による都市の破壊として進行しているわけであるが、残念ながら、この相互破壊は所詮共倒れにすぎない」(32頁)とすれば、「わたしたちの未来は、都市からも村からも意識的に自己疎外した〈異物〉の群れが、おのれの移動をそれぞれどのような結合において再び都市と村に内化しうるかにかかっていると思う。」(32頁)

このような観点から、武田は主体の問題に接近している。

2) 変革の主体としての子

ではこの内化は「村の思想」とか「里の思想」だろうか。そうではない。「問題はただ一つ、父だ！」(32頁)都市(父)こそが問題なのだ。「わたしたちは、父が変われば母も変わる関係をひたすら見ている。」(33頁)

武田は柳下村塾の思想について「一度あらゆる思想を拒否して、居民のぼうぼうとした時間意識の底にたどりつき、そこから一挙に反転しようとする意志」(32頁)と述べている。

この見地から問題はただ一つ、父だと述べられている部分を父を都市に母を村におきかえて紹介しよう。

「わたしたちは、都市(父)から犯され続けてきた村(母)をわたしたち自身に拒絶するが、村(母)を捨てて、村(母)の子として都市(父)の世界に身を売るような真似はしないである

う。わたしたちは、あくまでも村(母)の内部に他者としてあり、そこから村(母)が外化した都市(父)の世界の構造、むしろ村(母)が都市(父)を外化していく過程の構造を問い続けていく。」(33頁)

父(都市)と母(村)と子、というときの子とは、実は、都市でも村でも選択できる主体であり、母(村)にとっては子を父(都市)として外化することで父(都市)を外化していくとすれば、この主体的構造こそが問題にされるべきなのだ。

「都市(父)と村(母)との関係の構造をかえる契機としての他者、都市(父)を村(母)に内化することによって都市(父)でも村(母)でもなくなった子(主体)、それがわたしたちの存在論的な志向である。」(33頁)

3) 新しい連帯の構造と場

父と母は次に国家(父)と社会(母)にアナロジーされる。「父=国家と母=社会の二重性には、父=都市と母=村の二重性が影のように交錯している」(35頁)というのだが、このアナロジーには若干の無理がある。というのも、父=都市のイメージのなかには、父を「外化された生産力」(33頁)と捉える視点があった。とすれば、父=「外化された生産力」は国家ではなく、社会の方に属しているのである。すべてを父と母とにアナロジーしようとするれば、こうした論理上の矛盾が生

まれざるをえない。

この矛盾は別にして、武田の新しい連帯の構造と場についてのメッセージだけは受けとめることができる。

「わたしたちは村内部にあって村が〈屈辱〉する過程とたたかい、都市居住者は都市内部にあって村が〈復讐〉する過程とたたかっている。ただそれだけの違いがあるにすぎない。共通して目指すところは、子に媒介された新たな父母の結合、すでに都市でも村でもなくなったがゆえに、第三の都市とも第三の村ともよびうる新しい連帯の構造と場である。」(35頁)

このように、子とは、都市でも農村でもない、新しい連帯の構造と場であった。

第4節 内化論の展開

1) 自律土着の基礎視座

都市と村から他律的に規定された子の存在の構造は「他律土着」であろう。従って「新しい連帯の構造と場」を構造としてもった子は「自律土着」となる。「自律土着」について、すこし長いが、内化論の原点でもあるので引用しておこう。

「わたしたちが『自律土着』を志向するとき、その第一の基礎視座となるのは、人間の他律性は〈自然〉および〈生産力〉の自律性と対概念であり、その〈生産力〉は〈自然〉から外化された〈時間〉の論理にほかならぬという

ことである。人類はかつて〈時間〉に内化されることによって〈自然〉に内化されていたが、それは〈時間〉そのものが〈自然〉に内化されていたからである。これは人類が直接的に〈自然〉に従属していた時代、いいかえると〈自然〉が直接的に人類を『他律土着』させていた時代、すなわち土着前史にあたる。人類はやがて農業の発明によって〈自然〉と異質な生産関係をとり結び、〈自然〉に働きかける〈主体〉として自己を〈自然〉から外化すると同時に、〈時間〉を〈生産力〉として自己および〈自然〉から外化し、その論理に従属することによって語の真の意味において『土着』しうる。これが土着の第二段階、すなわち人類が〈生産力〉を媒介として〈自然〉に『他律土着』する段階であり、その有史が日本列島において少なくとも二千数百年におよぶのである。したがって『自律土着』とは、人類がいったん外化した〈生産力〉をふたたび自己自身に内化しつつ、同時に〈自然〉をも内化しうるよう再度その〈自然〉に向かって自己を外化していく意志とその現実的諸関係の構築である。

第二の基礎視座は、〈生産力〉に先行するもうひとつの時間的概念、すなわち〈移動〉である。人間は〈移動〉する必要がなければ〈生産〉しない。そこには〈移動〉が〈生産力〉を外化し、外化された〈生産力〉がさらに〈移動〉を外化していく地獄の因果関係が展開

している。

… 中略 …

わたしたちの第三の基本視座は、言うまでもなくこの〈内化〉である。」(36～40頁)

武田が構想する「自律土着」とは、人類が外化した生産力で自然に他律土着している現状における諸関係を組みかえることだった。

2) 内化の三つの条件

次に、「革命は一貫して言語革命として遂行される」(42頁)という立場から、武田は内化の三つの条件をあげている。

「(1) 言語の内化＝個人の無名化

(2) 移動の内化＝人間の共同化

第一群－都市の内化、文明の内化、科学の内化

第二群－工業の内化、労働の内化、分業の内化(起点)

第三群－医療の内化、育児＝教育の内化、死者の内化

第四群－権力の内化、制度の内化、言語の内化

(3) 時間の内化＝生産力の内化」(43頁)

今日の社会では言葉を発したときに、その言葉が生産力体系にとらわれてしまうという現実がある。武田はこの言語の外化に内化の論理を対置する。

「わたしたちはまず内化に向けて言語を外化し、わたしたち自身の言語体

系をかれらの生産力体系と革命的に対立させるところから闘いを始めねばならない。言語を真に内化しうる契機は〈闘争〉である。しかし『闘争』が〈闘争〉として成立しうるためには、そこで創出された集団言語が〈生活〉の場で〈運動〉化される質をもっていなければならない。」(44頁)

ではこの言語の内化が何故個人の無名化となるのか。

「個人の無名化とは人間の身体的存在からあらゆる個人幻想が削ぎ落とされた自由な状態、すなわち〈実存〉への回帰をいう。個人の無名化を集団的に保証するのが人間の共同化である。そこでは言語は自由に個人を通過することがなく、すべて共有を通して集団に内化される。」(44～5頁)

ここで述べられている言語の内化＝個人の無名化＝人間の共同化、という設定が可能となる条件は時間の内化がゆきつく先としての〈故郷〉の存在である。

「世界では普通土着からの移動という概念を立てるが、わたしたちは移動と土着、すなわち移動が論理的に土着に先行し、土着は移動の必然的形式であるという考えを立てる。農業以前と以後を問わず、〈故郷〉とは移動が土着によって空間化し、空間の時間性を喪失していく以前の自由な〈交通〉状態、したがって歴史上どの時期にもまだ実現されたことがなく、これから意

識的に創出していくほかない全般的な〈共同性〉意識への純粋な希求、ないし渴きとして人類に内化している。」(45頁)

この〈故郷〉論が恐らく武田の「内化の思想」のよりどころとなっているのだろう。

この〈故郷〉の設定は、先に「日常性と非日常性」のところで見たと2000年の業火と対になって、武田の革命運動論の根拠となっている。

3) 内化を保障するものとしての〈地域〉

この時間が内化されていく〈故郷〉とは、〈地域〉のことだった。

「わたしたちが『自律土着』する空間、すなわちコンミュニケーション化された〈地域〉とは、まず子に媒介された新たな父母の結合、すでに父でも母でもなくなったがゆえに、第三の都市とも第三の村ともよびうる新しい連帯の構造をもった場である。…

わたしたちが夢想する〈地域〉の第一の条件は、地域社会が都市として外化の掃き溜めになることもなく、村として外化の出納係になるのでもなく、それ自体、労働と生活、生産と消費において完結した地域空間として自立することによって、かえって地域間の自由な〈交通〉が保証されるような土着構造である。」(45～6頁)

このような〈地域〉を形成していく条件としては、時間の空間化と対決し、空間を時間化していかなければなら

い。「マルクスが措定した〈労働階級〉は、外化された〈労働〉の場で、外化されたこれらの文明論・都市論・科学論をつらぬく〈人間外化論〉と対決し、〈労働〉を〈生活〉に、〈生産〉を〈消費〉に内化していく先頭部隊、すなわち空間を時間化していく尖兵としてはじめて史上にタダシク位置することができる。」(48頁)

武田は〈地域〉現出の二つの条件、(1) 労働と生活および生産と消費において自立すること、(2) 労働を生活に、生産を消費に内化すること、をあげたうえで、第三の条件について述べている。

「第三の条件としてあげるのは、外化された専門家と専門機関を地域に内化すること、すなわち職業＝職種間の分業を集団的に克服して、地域内に専門言語と大衆言語の自由な交通を保証していくことである。専門は新しい集団性の中でかえって平等に尊重されるであろう。この三つの自由な交通に媒介されて、言語がグローバルに開かれたとき、時間の空間化は空間の時間化と一致しうる契機をはらむ。その瞬間に現出するのが〈地域〉である。」(54頁)

では〈地域〉とはどこにあるのか。「〈地域〉とはやがてあなたが死守する闘いの〈場〉にそっと送りこまれてくる、いまだほんの一包みの、しかし無限の回転能力をもつ小さな連帯の核エネルギーにすぎない」(56頁)。という

ことは、〈地域〉とは言語のなかにあることになる。

4) 複数の母たち、柳下村塾の現実

言語の内化を保障する人間の共同化の手がかりを武田は託児所での〈母〉の〈集団化〉からつかむ。

『複数の母たち』は、みずから〈集団化〉することを契機として私事化した子供との関係、私事化された夫との関係、すなわち〈母〉と〈女〉を同時に越えようとしている。それはまた、〈母〉に内在する〈父〉、〈女〉に内在する〈男〉そのものを越えることでもある。かれらが〈集団〉の中に見ている〈地域〉、〈内化〉された〈時間〉のイメージは、彼らが子供との関わりから捉えかえした〈身障者〉と〈健全者〉との関係に鮮やかにクローズ・アップされる。」(59頁)

〈身障者〉と〈健全者〉との関係については、保育や教育の問題としてとりあげれば、興味のある内容が展開されているが、ここでは言及しない。

「わたしたちは、〈身障者〉を〈生活〉に〈内化〉したとき、はじめて〈時間〉を〈内化〉した〈空間〉、すなわち〈地域〉の最終的なイメージを画くことができる。」(60～1頁)

「わたしたちはこの〈地域共和国〉の映像を、ささやかな託児所に仮想しつつ、ひとまず〈母〉の〈集団化〉にエネルギーの大半をさこうとしている。『複数の母たち』は柳下村塾の原点で

ある。言語革命の基像である。」(63頁)

「柳下村塾・内化の思想」は、実にこの託児所での実践の位置づけとして、人類史という壮大なスケールから語られた物語だった。

第2章 グリーンコープ結成

1) 託児所から生協へ

柳下村塾の土台となった託児所ではたべもの環境問題に気をくばってきたが、1978年には親の会を中心に「たべもの共同会やながわ」が会員400名で発足した。この共同購入会をもとに82年には600名の組合員で共生クラブ生協やながわを設立し、86年には組合員3000名へと急成長している。この生協設立を通し、武田は85年に福岡生協連顧問に迎えられ、たがわ生協争議の解決を目的とした「新しい連帯のための特別委員会」代表に就任する。

2年間の身をけずる活動で87年にたがわ争議は解決し、翌88年の生協連合グリーンコープ創立にこぎつけ、初代会長に就任する。以降94年8月に死去するまでグリーンコープの発展に力をつくすことになる。

2) 共生クラブ生協の原点

託児所の親の会が中心となって設立された共生クラブ生協については武田自身が作成した記録(グリーンコープ生協さが設立準備会への紹介文)があ

る。そこに設立趣意書が収録されているが、それには「母親連合の力で有害物質の人体攻撃と闘おう」という呼びかけがあり、自分たちの運動が「子を生み育てる母親の運動」であって、それをあらゆる人間関係を問い直そうとする大きな流れのなかに位置づけ、今日支配的な父性原理をしりぞけて母性原理を志向すると述べられている。

そして、たべもの運動を始めるにあたって加工食品中心の食構造を具体的に反省する手がかりとして、無農薬野菜の自主生産と自主配給および地場産業との提携を運動の基本にすることが主張されている。全体の旗印としては「自立・連合・共生」がかかげられた。

あと、共生クラブ生協の原点として武田は6項目をあげて紹介しているが、その項目だけを引いておこう。

「食べ物の子育ての感覚と手続きで、母親が運営の中心に
有機無・低農薬野菜と取り組む
食べ物ほんらいの姿にかえろう
豊かな地域活動をくり展げる
全県連帯を推進する」(『共生』武田桂二郎遺稿集、グリーンコープ発行、104～7頁)

この紹介文には福岡地区事業生協連合(ちくれん)の現状も報告されているが、それによれば、福岡県の8生協が連合に参加していたことがわかる。これらの生協を県規模でまとめて連帯し、さらに九州全体の連帯へ、具体的

にはちくれんと共生社との連帯にむけ、武田はたがわ生協争議を解決することで大きな流れをつくっていくことになる。

3) 学習会資料

柳下村塾の出発に当たり「伝習館・自立闘争宣言」でかけられていたものは「大衆の状況への下降」であり、「関係の構造そのものの変革」であり、「人類史と人間史の対立を止揚」することであり、「革命的言語=文体」の創出だった。

これらが「内化の思想」でもって統一的に捉えられ、「関係の問いなおし」から始まり、「新しい連帯の構造と場」としての「〈地域〉」づくりを「〈母〉の〈集団化〉」という実践的課題と結びつけたものが「柳下村塾・内化の思想」だった。そして、「内化の思想」という問題設定からもたらされる不可避の課題として、「人類史を見」きることがあげられていた。

1982年の日付を付されている「学習会資料」は、柳下村塾発足10年の節目に当たり、「内化の思想」の見地から人類史を整理し、それにもとづいて実践的な方向性を提起しようとする壮大な試みだった。ここで展開された人類史についての思想は、グリーンコープ宣言に盛り込まれているし、また、ここでは骨組みだけしか示されていなかった実践的な方向性は、グリーンコープ会長としての活動を経験するなかで次

第に具体化されていった。

「学習会資料」はまず「身体の進化」から論を説きおこしている。宇宙の始まりから生命の誕生、細胞の進化へと進められ、性差、人類の直立歩行へと展開されるが、そのポイントは、「女が男を分化する」というところにおかれ、ここから、デカルト以来の精神と身体との二元論の克服が「精神に対する身体、男の対する女の、疎外されたものに対する疎外したものの復権を計り、両者の相互作用関係をより高度に実現する」(274頁) こととしてはかられている。つまり、「上位疎外態のより直接的な下位疎外態への内化」という「内化の思想」が、人類史における女からの男の分化という身体的な発生上の類的及び個的歴史過程をふまえることで根拠づけられているのである。

「身体の進化」に続き「性と直立歩行の進化」「家族の進化」「言語と労働の進化」「社会の進化」というように論議が展開されているが、その方法論が次のように述べられている。

「人間の分化した性と直立歩行は、それに伴う言語と労働(生産)の進化、意識の進化、そしてそれを総括する社会の進化と共に、次のように進化する。但し、一応時間的な序列に従って叙述するが、現実的には時間的に早いものは遅いものによって決定的に媒介・止揚される。」(277頁)

人類史の見きりと共に注目しておかねばならないのは、言語を信号系から

説明する言語論と、社会を言語規制とコミュニケーション論から捉える社会論であるが、これらは90年代に入ってより詳しく述べられているので、ここでの紹介はひかえておく。

実践的な方向性としては結語で次のように述べられている。

「(1) 男(上位疎外態)が女(下位疎外態)に向かって自己解体する。

人間→自然、国家→社会、都市→農村、精神→身体

資本、市場、賃労働、分業→新しい連帯

(2) 自己外化のための自己外化=女歴史と社会の自意識=男

(3) 自己解体=自己外化の変革=相互透明化」(289頁)

ではこの方向性はどのように具体化されていったであろうか。

4) たがわ生協争議

『共生』にはたがわ生協争議に関連する二つの文書が収録されている。「連帯への記録」と「提言(1)」がそれである。

「連帯への記録」で述べられている思想的な内容は、第一に国家と社会の関係であり、第二に上部構造と下部構造の関係である。

国家と社会の関係については一般原理として次のように述べられている。

「近代市民社会の成立によって実態的には同じ国家と社会が論理的に分離し、社会は国家からの相対的な自立と

最終的な国家廃絶の契機をつかむと同時に、その国家廃絶のうらづけとなる社会の完全自立を実現するため、市場原理に支配された利益社会の止揚とそれに前後する新たな人間解放、すなわち二次的な共同社会の創造とそれを支持しうる人間のより高次の自立と連帯を次の課題として残した」(82～3頁)

ここで述べられている「社会の自立」については、「分業が階級・階層支配ではなく人間連帯・人間実現として機能する社会のイメージ」という注記がなされている。

この一般原理にもとづき、次に「関係の構造と止揚の方法」が述べられているが、そのポイントは、「後から疎外されたものを漸次疎外したのに向かつて不可逆的に止揚解体していくのが人間にとって唯一の、自由な、従って主体的な運動であるとわたしたちは考えています。国家と社会の関係についてはもちろん社会の自立と国家の廃絶を志向します。」(84頁) というところにある。

例えば、国家は社会から疎外され、男は女から疎外され、そして疎外されたものが疎外したものを逆に支配するという構造があるのに対し、疎外されたもの(国家、男)を疎外したもの(社会、女)に向かって止揚解体していく、つまり、社会と女を自立させていく、これが方法だとされている。

次に上部構造と下部構造の関係に

ついては、下部構造とされている経済も、「自然との関係では社会という上部構造に属」(85頁) することに注目し、人間社会を自然の上部構造とみなすことで自然という下部構造を重視するという下部構造重視の新しい意義を説いている。そのうえで止揚の方法としては、「分業をタテの支配系からヨコの連帯系に組み替えること」(86頁) を提案している。

5) グリーンコープ宣言

グリーンコープ宣言の起草は武田にとっては、その思想を具体化していく契機となったと思われる。この地球上での太古の生命の発生から説きおこされた宣言は、まさに「人類史と人間史の対立を止揚」することを志向し、「学習会資料」でその内容を解明してきた武田にとって、その止揚に向けての大衆的な問題提起としての意義をもっていった。

すでに「連帯への記録」で明らかにされた、「関係の構造と止揚の方法」をふまえて、宣言の思想を捉えかえしてみよう。まず農耕の開始以降の今日までの歴史が次のように項目だてられている。

「1. ヒトの群れ社会から人間社会が分化する。

2. 自然的な生産から農業的な生産が分化する。

— 自然的な時間から歴史的な時間が基本的に分化する。

3. 農業的な生産から工業的な生産が分化する。

— 自然的な時間から歴史的な時間が本格的に分化する。

4. 社会から国家が分化する。

5. 地域から職場が分化する。

6. 身体から精神が分化する。

7. 南から北が分化する。

8. 自然物質から合成物質が分化する。」(3頁)

この分化されたものと分化するものとの関係を分化されたものを分化したものにむかって止揚解体していく、という見地から、農業の自立、社会の自立、地域の自立、身体の自立、南の自立、といったイメージが導き出されてくる。そしてこのイメージは、人類史と人間史の対立を止揚するものとなる。そして、この止揚は分化(疎外)という関係の構造そのものの変革を意味するだろう。まさに武田が開始した「大衆の状況への下降」は、母親連合に到達し、ここから女の自立を媒介に「革命的言語=文体」を創出する闘いに入っていたといえよう。

第3章 内化の思想の体系化

1) 「無名舎」からの思想

『共生』に収められたグリーンコープ時代の活動の記録をみると、武田は非常にすぐれたコーディネーターとしての役割をはたしていたことがわか

る。現実政治家としての鋭いセンスの他に、やはり深みのある「内化の思想」の血肉化がその役割を可能にしたのであろう。そこで、グリーンコープでの活動の記録、つまりは武田の実践について追っていく前に、柳下村塾(92年に無名舎に改称)から発信された後期の思想を見ていこう。

『共生』には「無名百年より」という最終章に7編の論文が収められている。「原風景が崩壊する」には1990年、「内化—工業と農業に内化する」には1993年の発行年が記録されている。先に見た「学習会資料」にすでに述べられていた言語を信号系から説明する言語論と、社会を言語規制とコミュニケーション論から捉える社会論がこの二つの論文では一層詳しく展開されている。

2) 「言語規制の自立の論理過程」

「原風景が崩壊する」は、『思想』78年11月号の高橋義孝論文を手がかりに原風景についての考察を進めているが、この高橋論文について「最近」と書いていることから、書かれたのは80年前後のことかも知れない。それで82年の日付がつけられている「学習会資料」とセットにして武田の言語規制論をみてみよう。

まず前提にあるのが、言語と意識を三つの信号系から説明する意識論で、第一信号系とは前コトバ的感性的認識の世界、第二信号系とは人間に特有の

コトバ的信号系の世界、第三信号系とはコトバとしては指向対象のない数や論理の世界、というように区分される。そのうえで言語規制の自立の論理過程について次のようにまとめている。

「(a) 言語の獲得によって、先ず人類のコミュニケーションの位相が三つの信号系に階梯化される。

(b) 次に、人類の即自的なコミュニケーションが、第一信号系においては、内部コミュニケーションの疎外による内部コミュニケーションと外部コミュニケーションの対関係への分化として、第二信号系においては、自己外化の疎外による自己外化とコミュニケーションの対関係への分化として、第三信号系においては、言語規制の疎外による言語規制と自然規制の対関係への分化として対自化される。

(自己外化=言語の時間性の本質、コミュニケーション=言語の空間性の本質)

(c) さらにコミュニケーションの対象が外部(自然規制)から次第に内部(言語規制)に移行し、内部コミュニケーションの対象に転位する。すなわち内部コミュニケーションが自立する。そしてそれを通して言語規制が成員に逆立ちしてくる。」(「学習会資料」『共生』287頁)

「学習会資料」はこのあと「言語規制の自立の現実過程」として、神、王、資本がそれぞれの段階をなすものとして

あげられ、ついで「言語規制の自立の意識過程」として、先の三段階を意識過程から捉えかえし、さらに「自己外化のための自己外化」と「自立のための自立」という項がつづく。何となく言わんとしているところは了解できるが、しかし、論理的ではないので理解しがたい。

3) 分化、外化、内化、疎外

そこで『共生』から武田独特の用語の説明となっている部分を拾い出すことから始めよう。

まず最も基本的な用語である、分化、外化、内化、疎外について。

「分化するとは私の場合、外化すると疎外するの二重があるという意味で書きました。」(178頁)

「内化は外化の一種で疎外にならない外化」(351頁)

武田の外化、内化、疎外に近い内容をもっと概念的に規定しているのが真木悠介である。真木にあっては疎外=物象化であり、物象化という概念をもたない武田とはこの点で異なるが、真木は「外化をとおしての内化」と「外化の疎外への転回」とを区別し、前者を労働の論理、後者を物象化の論理と捉える。

真木の「外化をとおしての内化」とは労働の回路と交通の回路に見られ、労働にあっては外化=対象化、をとおしての内化=享受であり、交通にあっては外化=譲渡、をとおしての内化=

領有とされる。そして疎外は、労働過程におけるこのそれぞれの外化をとおしての内化の回路が、内化として回収されざる外化として、その還流する回路を遮断されるとき起こるものとされる。(真木悠介『現代社会の存立構造』104頁)

このように真木の場合、労働と交通(交換)に限定されているが、武田の場合、時間や言語にまで、外化、内化の論理をあてはめる。

すでに見たように、武田が内化の思想に到達したとき、その内実は「時間の内化」であった。ここから出発して「言語の内化=個人の無名化」「移動の内化=人間の共同化」「時間の内化=生産力の内化」と展開され、さらに「まず内化に向けて言語を外化し、わたしたち自身の言語体系を彼らの生産力体系と革命的に対立させるところから闘いを始めねばならない」(「内化の思想」『伝習館・複数の母たち』44頁)と述べられているから、真木のように労働や交換といった、人間の活動の対象化されたものについて語る場合とちがって、無規定なものになっている。というのも、武田にあっては言語にしても、移動にしても、時間にしても、人間の活動の対象化されたものではなく、それゆえ内化(享受、領有)するといっても、対象的でないものを相手にすることになるからだ。

4) 時間、空間

次に基本的な用語は時間と空間である。もともと時間は労働、空間は意識との関連で捉えられていた。

「時間が人を媒介にとして空間化していく……農業を通して時間が空間の中へ別物としてどんどん変えられていく」というとき、時間の推移のうちでしか意味をもたない労働が、労働生産物をつくり出すことで、空間を占めるものをつくり出す、ということが念頭におかれ、時間の空間化がイメージされている。そして「意識が意識空間をつくり、意識空間がまた意識をつくっていく」という転移、生産力を外化し、外化した生産力に今度は人間が従属していく(『共生』245頁)というように、空間の時間化(意識空間が意識をつくる)が、意識を媒介に論じられていた。

ところが「学習会資料」では、新たに「自己外化=言語の時間性の本質、コミュニケーション=言語の空間性の本質」というように、時間と空間とが外的なものとしてではなく、言語の属性として捉えられるに到っている。そして、労働も時間性と空間性をもつものとして捉えかえされる。そうすると、人間の類的疎外も「労働の本質を空間性(コミュニケーション)から時間性(自己外化)に転化」(292頁)することとして捉えられるようになる。「言語の時間性の本質は自己外化であり、空間性の本質はコミュニケーションである。また労働の時間性とは、労働による自己外化、あるいは労働の自己外化的な側面をさし、労働の空間性とは、労働によるコミュニケーション、あるいは労働のコミュニケーション的な側面をさしている」(307頁)

5) 狩猟から農耕へ、言語規制の変化

以上の用語の概念をふまえた上で、「言語規制」に移ろう。武田は「自然規制」から「言語規制」への移行というように問題をたてている。自然規制の時代では第二信号系(コトバ)は第一信号系(感性)に内化され、人類は身体的思考を行っていたが、第一信号系から第二信号系が疎外され、同時に第二信号系から第三信号系が疎外されて(神や王の出現)、それが言語規制として自然規制の上にかぶさる(304頁)というわけだ。

「人間の人間化を対自然的に保障するのが言語規制であり、対社会的に保障するものが内部コミュニケーションの自立」(316頁)というように展開される。

ここで「内部コミュニケーション」とは人と人との間のコミュニケーションのことであり、「外部コミュニケーション」とは人と自然との間のコミュニケーションのことである。

では、「人間が自然規制に対して明らかに一定の自立姿勢に転じている」(309頁)狩猟民社会と内部コミュニケーションの自立がみられる農耕社会との言語規制のちがいについての武田

の説明をみてみよう。

まず狩猟社会について。

「狩猟は狩猟対象(移動する自然=動物)と狩猟行為(協同作業)の双方に、対関係に分化し、対関係として疎外された一定の知識と行動の主体性を必要とする。すなわち前者に対して狩猟(外部コミュニケーション)の技術が、後者の関しては協同(内部コミュニケーション)の技術が、そして何よりもそれを対関係において可能ならしめる言語規制の一定の自立が不可欠である。狩猟社会では、その意味でコミュニケーションは明らかに外部コミュニケーション(狩猟)と内部コミュニケーション(バンドと家族)の対関係に分化し、対関係として疎外され、群れ社会の時代とは反対に、前者が間接的な規制として、後者が直接的な規制として性的コミュニケーションの上に被さり始めている。この二重の規制はいずれも自然と人間との間に介在する言語規制であり、狩猟社会はその内部比率にしたがって、論理的あるいは方法的に自然規制から自立しはじめている。」(309-10頁)

このあと狩猟社会での神の成立について論じられているが、この点についてはひとまず置いておこう。次に農耕社会について。

「人類がこの可能性(内部コミュニケーションの自立)に達するのは、もちろん定着農耕の発明と余剰生産の開始によってである。……観念的には自

然に対する主体意識の疎外（内部コミュニケーションの疎外）、技術的には食糧となる自然の貯蔵と再生産の方法の疎外による言語規制の自立の物質的基礎の疎外、すなわち剰余食糧の蓄積とその物象化（制度化を含む）である。

幸と不幸の対関係を含むあらゆる対関係の疎外が始まるのは、この食糧の自主生産で可能となった剰余生産をとおしてである。つまり狩猟時代のかなり早い時期に論理的に疎外された言語規制が、剰余食糧の対象化によって一挙に立体化し、構造として疎外され、自然規制から自立する現実的な可能性に達する。すなわち共同体は共同体となり、神は神となる。そして人類史は、この共同体と神の対関係が言語規制として自立し、その構造変化をとおして、徐々に自然規制の直接性を代替して行く過程へと踏み出すのである。」(311頁)

実は論文「原風景が崩壊する」のこのあとに、「学習会資料」から引用しておいた「言語規制の自立の論理過程」が若干修正されて再掲されている。従って、さきに理解しがたいと述べておいたが、この「論理的過程」は、いま引用した狩猟社会と農耕社会についての記述のまとめなのである。そして、その次に言語規制の自立の現実的過程についての記述がつづいているので、さきにそれを見てみよう。

6) 「言語規制の自立の現実的過程」

武田によれば言語規制は三段階になっている。第一段階とは「神→神殿→神官→軍隊の系譜」であり、第二段階とは「王→宮殿→廷臣→軍隊の系譜」であり、そして第三段階とは「資本→企業→経営管理層→労働者」の系譜だという。

ここで神が出てくるので、さきに「言語規制の自立の論理過程」の検討のところでも留保しておいた、神についての武田の記述をみてみよう。武田は狩猟社会でコミュニケーションが外部コミュニケーションと内部コミュニケーションの対関係に分化したとき、言語もまた自己外化（時間性）とコミュニケーション（空間性）の対関係に分化しているはずだと述べたあと、次のように展開している。

「すなわち、それ（言語）は先ず外部コミュニケーションにおいて、直接的な生存・労働・闘い（恐怖・怒り・喜び・不満などの反射を含む）として条件反射的な空間性のコミュニケーションと、呪詛・期待・願望・征服欲など条件反動的な時間性のコミュニケーションとの対関係に分化し、その条件反応（自己外化）の本質的な部分が、生意識の一定の成熟に媒介されて、超自然的な実在、すなわち神として疎外される。神は狩猟社会における時間性の最高の表象であり、この神に対応する空間性の最高の表象として、われわれは内部コミュニケーションの

中に首長あるいは長老を見出すであろう。」(310頁)

このようにして出現したとされる「神→神殿→神官→軍隊の系譜」はまだ実のところ自然規制の系譜だと武田はみなしている。そしてこれが「王→宮殿→廷臣→軍隊」という言語規制の系譜を生みだすが、それは次のような現実的過程をへるとされる。

「蓄積された剰余食糧から、言語規制の第一段階として、神→神殿→神官→軍隊の系譜が疎外される。この事実は二つの意味を持っている。第一に神は想像以上に早くから、小は木の枝に刻み付けた単純な印から、大は巨石文化のドルメンに到るまで、様々な依代によって記号化されてきたが、この神の記号化は、もともと神を記号として疎外することであり、疎外することによって無化する契機を含んでいる。すなわち人類は、自然規制の直接的表象として神を記号化することによって、究極的に自然規制そのものを無化する論理的な手掛かりを掴むのである。——この無化はもちろん存在としての無化ではない。——第二に神の住居が空から森や山や川や湖を経て神殿に移されたことは、神が大地と人間の世界に深く誘い込まれたこと、そしてその現実的な基盤として、神→神殿→神官→軍隊の系譜の中に、王→宮殿→廷臣→軍隊の系譜が内在していたことを意味する。」(312頁)

こうして自然規制の系譜である言語

規制の第一段階のうちその第二段階が内在しており、こうしてこの第二段階が疎外されてくるが、この第二段階は「共同体と神の対関係が自然規制中心から言語規制中心に移行していく過程」とみなされる。

「それは第一に、自然規制の直接的表象であった神が、言語規制の介在によって間接的表象として遠ざけられることを意味すると同時に、神は王に表象を変えて言語規制に内在し、共同体と神との対関係の疎外態が変わるのであって、疎外された共同体には常に疎外された神が対応するという対関係の本質は永久に変わらないのである。」(312 - 3頁)

では内部コミュニケーションの自立を内実とする言語規制の第三段階は、どのようにして形成されるのか。

「この第二段階は、歴史事実として見る時には、疎外権力による人身支配から土地支配への移行過程にほかならない。すなわち外部コミュニケーションの主たる対象は依然として自然であり、その内部コミュニケーションにはまだ自然規制の遺相が濃厚に残留している。従って第二段階から第三段階への契機、言語規制の真の自立の契機は、内部コミュニケーションの自立、いいかえれば、外部コミュニケーションの主たる対象が自然から内部コミュニケーションに移行することでなければならない。このように、共同体の自立が言語規制の自立として、言語規制

の自立が内部コミュニケーションの自立として構造的に保証された時、神はその内部コミュニケーションの自立の契機を直接に表象してはならない。すなわち貨幣＝資本は、第二次生産革命に始まる資本主義（第三段階＝資本→企業→経営管理層→労働者）によって物神化されるのではなく、最初から物神として歴史に登場して、資本主義を用意し、実現し、そして完成するのである。」（313頁）

7) 再び「言語規制の自立の論理過程」

この言語規制の自立の現実的過程をふまえ、先に「学習会資料」から引用しておいた「言語規制の自立の論理的過程」について、その内容をかみくだいてみよう。まず、(a)と(b)について。

人類の動物としてのコミュニケーションが、言語を獲得することでその位相が三つの信号系に階梯化される。

感覚的なものを捉える領域が、言葉の成立によって第一信号系に階梯化されることで、対自然のコミュニケーションから人と人との内部コミュニケーション（協同）がもとの動物的人間から疎外され、こうして動物的人間は対自然コミュニケーション（内部）を対関係としてもつ動物を超えた人間となる。

次に言葉を使いこなす第二信号系にあっては、動物的人間から発話することが疎外され、発話とコミュニケー

ションの対関係をもつことで動物的群を超えた人間の集団が形成される。

最後に論理と数をつかさどる第三信号系にあっては言葉による規制が動物的人間から疎外（生み出）され言語規制と自然規制との対関係をもつ人間の社会が形成される。

武田の念頭にある「言語規制の自立の論理過程」の(a)と(b)とは、およそこのようなことではなかろうか。

8) 「言語規制の第四段階」

これまで武田の言わんとするところを理解する、ということで論を進めてきたが、もうすこし、この調子で続けてみよう。武田は言語規制の三段階を述べたあと、第四段階について展望し、そして、それを実現する方法について模索している。そのときに要になっているものが「内部コミュニケーションの自立」である。従って「言語規制の自立の論理過程」の(c)については、これらを検討したうえで、とりあげることにしよう。

武田は、言語規制の三つの段階について要約したうえで、第四段階について次のように述べている。

「以上述べたことを要約するとすれば、それは第一に、疎外は常に言語の分化と汎化の対関係、およびそれに伴う社会構造の疎外として行なわれてきた、第二に、疎外は一貫して自然規制からの自立、すなわち共同体と神の対関係の疎外とその地上化→人間化→の

方向で行なわれてきた、第三に、現段階では、神は地上化されて国家レベルの王（権力）と社会レベルの企業（資本）に分身している——それは言語規制が内部コミュニケーションの自立によって国家と社会の対関係に完全に二分されるからである——が、まだ十分に人間化されていない、ということになるであろう。われわれはここから、権力と資本の二重構造を止揚した第四段階を容易に想定し得るであろう。しかしこの第四段階は次の二点をワンセットでわれわれに要求している。

1. われわれが権力と資本の二重構造を止揚するという時、それはわれわれが三つの段階の最初の二つの段階、すなわち『奴隷』『農奴』を経ていま現に到達している『労働者』ないし『市民』を、具体的にはその自己外化とコミュニケーションの方法、すなわち＜言語＞を止揚するというでなければならない。

2. われわれが権力と資本の二重構造を止揚するという時、それは言語規制が現実的に自立した時点で、その言語規制と自然規制との対関係を本質的に組み換える——すなわち自然規制を真に無化することによって、同時に自立した内部コミュニケーションの構造、すなわちあらゆる幻想的な人間関係を無化することでなければならない。

このことはたぶん、われわれが人間として人間の構造的な自立そのものの

意味を問うことになるであろう。」
（313 - 4頁）

9) 内部コミュニケーションの自立

次にこの言語規制節の要となっている「内部コミュニケーションの自立」について見てみよう。長文だが引用しよう。

「人間が自然規制から最初に自立した社会層として、いわゆる余剰食糧の独占的私有を疎外した時、すなわち人間が支配層をととして人間自身を支配＝収奪の対象として対象化し始めた時、狩猟時代に論理的に疎外された内部コミュニケーションが現実的に立体化し始める。内部コミュニケーションの自立は、自立権力の疎外、いいかえれば、疎外した自立権力を媒介とする人間の自己対象化から始まる。

この内部コミュニケーションの自立はその自転運動として具体的に展開される。すなわち内部コミュニケーションの自立の物質的な条件が疎外された時、先ずそれ自身が社会的上限であり、かつ自然規制からすでに一定程度に自立している支配層において、時間性の自己外化と空間性のコミュニケーションが、いいかえれば、神と王が、第一に論理的に同位し、第二に現実的に接近する。この第一、第二過程で権力の即自的な自己意識が疎外される。この権力の即自的な自己意識が覚醒することなく、自然および異族に対する共同体の即自的な自己意識が覚醒する

ことはおそらくあり得ない。第三に、時間が空間性に内化し、一元的な時間性として下向的な、全体として上向的な自転運動を開始する。ジェスイットの道徳範例は、権力の即自的な自己意識が覚醒しているばかりでなく、すでに自転運動の自己意識として対象化されていることを示している。第四に、この権力の自転運動が人身支配→土地支配→資本支配——この段階で国家レベルの自転軸＝権力に対し、社会レベルの自転軸＝資本が疎外される——の系譜をとおして、支配形式、すなわち内部コミュニケーションの基本形式を変えつつ、支配対象の奴隷→農奴→市民（労働者）として社会的に組織していく。こうして内部コミュニケーションの自立は何よりも先ず広義の階級闘争として社会的に現出し、第一に、それをとおして、自然規制時代の社会構造が徐々に破壊される。第二に、その過程で、人間の自己対象化から自己意識を疎外する内的論理が自転運動の内的論理として社会的に蓄積される。

すなわち、最初に疎外された自転運動の内的論理、権力の自己意識としての権力のための権力の論理、あるいは共同体の自己意識としての共同体のための共同体の論理が、第一に、階層分化によって生ずる様々な社会集団に分化され、空間性に内化した時間性の自転運動の論理、すなわち経済の富の論理、基本的には生産のための生産の論理の系譜として構造される。この『経

済』はもちろん国家と社会の分離によって『政治経済』に分化総合される。第二に、それと対関係に、空間性を内化した時間性の自転運動の論理すなわち言語の富の論理、基本的には人間のための人間の論理の系譜として、技術のための技術、芸術のための芸術、学問のための学問、性のための性、その他、人間の根源的な自由を結節する『それ自身のために』の論理が意識の全領域に析出されていく。これらの自己意識は、たとえば技術なら技術が発生すると同時に、その技術に固有の論理として即自的に内在している。ただそれが自己意識の意識として疎外されるのに、近世から近代にかけての数世紀を直接に必要とするに過ぎない。そして第三に、前者が絶えず後者を内化していくこの経済の富と言語の富の対関係が、最終的に自然過程、すなわち人間化のための人間化過程、あるいは自立のための自立過程として総括される。いいかえれば、それらをそのように総括するものとして、後者からさらに純粹時間、すなわち純粹論理（デカルト）と純粹意識（パスカル）の対関係の流れが疎外されるのである。」（316 - 8頁）

武田によれば言語規制の第四段階とは、権力と資本の二重構造の止揚であり、そしてそのためには第三段階における言語の自己外化とコミュニケーションの方法を止揚することが問われ、またこのことは言語規制と自然規

制との対関係を本質的に組みかえることが要求されると主張している。

このような第四段階の設定とその止揚の方法は、実は「内部コミュニケーションの自立」ということの意味からもたらされている。「学習会資料」で「内部コミュニケーションの対象である言語規制が徐々に外部コミュニケーションの対象に転移する」というように述べられている「内部コミュニケーションの自立」の問題がいよいよ解明されねばならない。

武田によれば、内部コミュニケーションの自立とは、権力のないところに自立した権力を打立て、この疎外された自立権力を媒介にして人間が自己を対象化するところから始まる。一たんこの過程が始まるとそれは自転運動を開始する。この自転運動とは支配層における権力の自己意識の覚醒にもとづく権力の自転運動であり、これは人身支配から土地支配へと進み、さらに資本の支配を実現する。この各種の支配形式が内部コミュニケーションの基本形式であるので、内部コミュニケーションの自立はまず広義の階級闘争として社会に出現する。

このように捉える武田にあっては結局は一番最初に出現した内部コミュニケーションの自転運動の論理たる「権力の自己意識としての権力のための権力の論理」が問題だ、ということになる。

以上のような説明をふまえると、

「学習会資料」の(c)の内容は、実は権力が成立し、権力の自転運動が起こり、階級が形成されていくことで、本来内部コミュニケーションの対象であった言語規制が、階級対階級という形で外部コミュニケーションの対象へと転化し、人と人とのコミュニケーションとしてあった協同を内実とする内部コミュニケーションが、人と自然との間のコミュニケーションとしてあった外部コミュニケーションをとり込むことで、自立するとともに、当初の協同の内実を失っていく、という意味なのだろう。

10) 権力と資本の二重構造の止揚

武田は権力と資本の二重構造の止揚としてたてた第四段階を実現する方法として「新しい時間性と空間性の対関係の創造」をかかげている。次にこの方法にうつろう。武田は先ず言語規制が作り出してしまった事柄について次のように述べることから論を起している。

「1. われわれが言語規制として自然規制から自立すればするほど、それはわれわれにますます多くの解放をもたらすと同時に、ますます多くの危機をもたらすであろう。それはあるいは人類としての存立そのものを脅かす危機であるかも知れない。

2. 言語規制の自転運動、あるいはそれを保障する内部コミュニケーションの自転運動は、その自転軸となるも

のを必ずや物神として疎外し、われわれにますます多くの解放をもたらすと同時に、ますます多くの従属をもたらすであろう。それはあるいは人類の存立そのものにどこまでも付きまとう影のようなものであるかも知れない。それでもわれわれは、すなわち疎外された言語規制、疎外された内部コミュニケーションは、もはや自転することそのことを決して止めようとしないうであろう。」(320頁)

ある種運命論的にひびく、このような暗い見通しのなかで、武田は「疎外克服の方法もまた疎外過程の中に用意されているはずである」(320頁)ということに一すじの光明を求めている。「もしわれわれが言語規制の自転運動を止めることができないならば、自然規制から自立すること自体が、自然をあり得べき対対象の空間性として措定することとなり得るように、またもし内部コミュニケーションの自転運動を止めることができないならば自転すること自体が、それ自身の神々を無化することとなり得るように、われわれは一元的に後者の方向を定めることができる。」(320頁)

このような考え方にもとづいて、上位疎外態の主体性を、より大きな下位疎外態の主体性に包摂すること、具体的には「都市は農村を、職場は地域を、男は女を、オトナはコドモを、そして教師は生徒を、それぞれ自己意識の必然的な契機として所有し、すなわ

ち真の対対象の空間性として措定し、時間性と空間性の対関係、すなわち交通形態の構造的な変革を試行」(321頁)することを提案している。

11) 山元言語論の継承

武田の後期の思想について最後に「内化—工業を農業に内化する」で述べられている言語論をとりあげよう。武田は第三信号系の存在を主張した山元一郎の『コトバの哲学』について次のように評価している。

「山元一郎氏(故人)の『コトバの哲学』、つまり信号理論の功績はそれまで世間に公認されていたパブロフ理論では『ことば』の第二信号系と、『ことば』に対応する実物・実体としての第一信号系と、この二つしか信号系がなかったのに対し、『論理と数』は『ことば』ではないこと、つまり『ことば』に対応する実物・実体がないことを丁寧に証明して、これを新たに第三信号系とした点に主としてあります。

信号理論はとくに社会理論の解釈と直接に関係しますから、『論理と数』の摘出はその意味で、むしろ私の社会理論理解に衝撃を与えました。」(349頁)

ここで武田は「論理と数」が第三信号系であるのは「事実の客観性においてであって、人間の主観性においてはありませぬ。論理も数も人間の主観性を考慮すると忽ち『ことば』の次元に変更する一面を持っています」(349

頁)と述べている。その上で山元理論を深めていく方向性について次の提案をしている。

「自然の中で最も重装備の人間の位置を確定し、その人間としての責任を新たに問う方向で、山元理論を祖述し直す方法はないかと皆さんに問うたのです。ご参考までに記します。

※山元氏は上位信号系は下位信号系に『階梯的に依拠している』ことを強調します。私はそれに次の数点を加えたいと思います。

①『ことば』が人間のすべてである。『ことば』はあらゆる方法を駆使して意識に迫っている。ある場合には拡大している。その際、偶然は事実の客観性に属する。

②第二信号系の『ことば』は第一信号系の『実物・実体』と第三信号系の『論理と数』をどこかで包摂している。

『どこか』とは人間の主観性か？

③人間の『ことば』、意識、態度は、他の一切のものの運命に恣意的な一撃を与える。

④現代に最終必要なのは細部への分化ではない。人間への総合である。」(350頁)

以上、すこし長くなったが、武田の後期思想について、そのポイントを紹介してきた。次に章をあらためてこの武田の思想の批判を試み、そのうえでグリーンコープ会長としての武田の言説についての評価を行いたい。

第4章 武田の思想の批判

1) 武田説の特徴

武田は山元理論を祖述し直す方法について述べたところで『ことば』が人間のすべてである」(350頁)と言っている。これは単なる比喩ではない。「学習会資料」には、次のような「進化」論が展開されている。

「社会の進化の第一の契機は身体の進化(多細胞化→性分化→直立歩行→ホミニゼーション)であり、第二の契機は言語と労働(動作・行動・生産)の進化である。この進化は社会の総体的な進化の身体=人間レベルに位置づけられる。

言語と労働は対関係において進化する。」(282頁)

「この言語の進化は労働の進化に媒介されて次のような社会の進化をもたらす。」(286頁)

このように武田にあっては、人間社会のすべては言語から始まるものとされている。従って、革命も「一貫して言語革命として遂行される」ということになる。この言語革命の内容とは、伝習館闘争時代にあたる初期にあっては「自立言語」の創出であり「言語の内化=個人の無名化=人間の共同化」であった。そして、「学習会資料」から始まる後期にあっては、言語規制と自然規制との関係の組み換えとされている。

では、ことばが人間のすべてである、という見地から社会をみたとき、そこにある支配・隷属の関係はどのように捉えられるだろうか。それこそが、「内部コミュニケーションの自立」とその「自転運動」に他ならなかった。そして、この自転運動の内的論理は人類史上最初に権力が成立し、それが権力を自己目的化するところに発生するものとみなされている。

「最初に疎外された自転運動の内的論理、権力の自己意識としての権力のための権力の論理」(317頁)これにアナロジーして、「生産のための生産の論理」というように今日の支配形式もその自転運動の内的論理の帰結として説明されてしまっている。例えば、貨幣や資本についても次のように述べられている。

「貨幣=資本は、第二次生産革命に始まる資本主義によって物神化されるのではなく、最初から物神として歴史に登場して、資本主義を用意し、実現し、そして完成するのである。」(313頁)

このように捉えるところからは、今日の社会の諸現象や諸論理を全て過去にさかのぼって説明する、という方法が導かれてくる。そしてこの方法こそが、武田の分化、外化、内化、疎外をキーワードとする進化論がもたらすものだった。

2) 批判の方法

言語とは人間の意識の形式であり、従って観念の世界を構成している。この言語世界に人間のすべてを見る武田は、この言語世界という観念の世界での動きを捉えなければならず、それがまず「進化」として押さえられる。

次に「時間」と「空間」である。言語は発話にあっては時間的継続を必要とし、時間のなかでしか言葉をつむぐことはできない。他方、眼で世界を見るとき、一瞬のうちに空間を捉えられる。この時間と空間で言語を捉えると、それは分化(外化、内化、疎外)となる。

言語は分化によって時間と空間のうちにその位置を占め、そして、分化は内部コミュニケーション(人と人)と外部コミュニケーション(人と自然)というルートをとって波及する。さらにこの分化のレベルが、人間の心経心理学的見地から三つの信号系へと区分され、観念世界にある種々の信号(記号)がどのレベルの信号系にあるかが示される。それを具体的に記述したものが「学習会資料」だった。宇宙の誕生から始まるこの壮大な進化論についてどのように評価すべきであろうか。

いくつかの評価軸を立てよう。まず人類史に関しては現代社会こそがそれとして検討されるべきで、現代社会の基本的な問題を過去の人類史にさかのぼって発見するという方法は採用しない。従って武田の人類史についての説

について検証はしない。次に社会を革命しようとする意志は尊重する。したがって社会変革の理論として組み立てられている限りでの言語と社会の進化論に対しては、その妥当性が検証されるべきである。最後にことばは人間のすべてではなく、革命は必ずしも言語革命として遂行されるわけではない。武田も言葉では言語革命といいつつも、内実は諸関係を組みかえる文化革命を提起している。これは要するに社会関係を捉える際に、観念的なものは物質にとりつかれている、という点について十分考慮していないことの帰結であると捉え、武田の革命思想を物質的諸関係とのかかわりで捉えかえし、その積極面を生かしていく。

3) 社会変革の理論としての欠陥

社会変革の理論として見る限りでの武田説の欠陥は階級支配の原理を「最初に疎外された自転運動の内的論理、権力の自己意識としての権力のための権力の論理」(317頁)に求めてしまったことにある。

ここからは「内部コミュニケーションの自転運動」(支配形式の永続)は止められず、「言語規制」は革命言語の形成を不能にする、という運命論が導かれてしまう。そこで武田はあくまでも革命を求め、「疎外克服の方法もまた疎外過程の中に用意されているはず」(320頁)だという見地に立つ。それは「自転すること自体が、それ自身の

神々を無化することとなり得るように、われわれは一元的に後者の方向を定める」(320頁)というところに求められ、「上位疎外態が下位疎外態に向かって自己解体する」(289頁)とか「後から疎外されたものを漸次疎外したものにむかって不可逆的に止揚解体していく」(84頁)とか言われているが、これは実は「自転運動」の解体であり、自転すること自体ではない。一たん「内部コミュニケーションの自転運動」の成立を認め、そこに疎外の原因を求めるなら、その自転すること自体のうちに疎外を無化する方向など求めようがない。そして、自転運動に対して自己解体が可能なら、自転運動は内的論理をもっていなかったことになる。

自己解体とは武田によれば既成の諸関係の組みかえによる新しい諸関係の形成である。これは「言語革命」によってなしうるものだろうか。武田自身、言語の内化=個人の無名化=人間の共同化というイメージを描いていた。言葉が運動に先行することもありうるが、しかし通常は運動が言葉に先行しているのではなからうか。自己解体する言葉がまずあるのではなく、自己解体しうる関係の形成が先行するのではなからうか。むしろ、「内部コミュニケーションの自転運動」の内的論理にとらわれているかのごとく見える「言語規制」が新しい諸関係を含みうるから、自己解体が展望できるのではなか

ろうか。

4) 進化論と言語論の問題点

このような社会変革論における困難はどこからもたらされているのだろうか。分化を基本とする武田の進化論が検討されるべきである。

武田が、言葉や労働や社会の進化を考えると、身体の進化をモデルにしている。身体の進化が単細胞の多細胞化、性分化、直立歩行、ホミニゼーション(大脳化現象)というように進んできたこととのアナロジーで、言語の進化が第一信号系(感覚)、第二信号系(言葉)、第三信号系(論理と数)、というように身体の生理作用のちがいが捉えられる。この言葉の進化が物質化して労働の進化に転化するとされているが、これは技術の歴史が述べられているだけで、思弁的な展開はない。これに対して、社会に対しては、第一信号系に位置するものが身体、第二信号系に位置するものが労働、職業、地域、そして第三信号系に位置するものが生産力、組織、国家、とされている。

このようにアナロジーでこと足れりとしてしまう原因はどこにあるのだろうか。それは身体の進化をもつばら分化から説明していることに帰着する。武田の進化論には分化しかなく、融合や共生がない。また、生命と環境との相互作用も検討されていない。全ては最初の始原から分化したものとして説明されてしまう。

生物の進化に限っても、環境の変化による嫌気性の微生物から好気性の微生物への交代や、共生によるミトコンドリアの生成などの例は分化の論理からは出てこない。

次に言語を人間の生理的な信号系から説明していく山元説から、第三信号系に当る論理と数は言語ではないという見解をとり入れているが、この山元説だと、指示対象をもつもののみを言葉とし、それをもたないものは言葉ではない、という言語論になる。これは具体的な名辞のみを言葉とみなす、という点で誤っている。「そののそれ」とか、「あそこのあれ」は言葉ではない、というなら、そんなことを主張する人の言語観の方が誤っていると言う他はない。

言葉が数や論理を表現しているとき、数や論理は指示対象となっていて、それ自身は言葉ではない、ということかも知れないが、数や論理は現実世界の観念による抽象であり、それ自体言語としてしか存在しようがない。ただ具体的な名辞を使いこなす神経系と、抽象的な言葉である数や論理を使いこなす神経系とは異なっているかも知れない。しかし、それをもって数と論理は言葉ではない、という結論は導き出せない。

5) 数と論理も言語である

では武田は何故、数と論理は言葉ではない、という山元説を受け入れたの

であろうか。その原因は、武田自身が数と論理、とくに論理を言葉ではないと理解していたことにあるとしか考えられない。

武田にあっては論理とは人間の側にあるのではなく、客体の側にあるものと捉えられているのではなかろうか。

「言語規制の自立の論理過程」(311頁)とか「内部コミュニケーションの自転運動」(320頁)の「内的論理」(317頁)とかで使われている「論理」とは、言葉化されていない、したがって人間にとっては未知の、運動自体がもっている運動の衝動のことを指しているのではなかろうか。これを論理だと言うなら、それは神の摂理となってしまう。論理とは人間がつくったものである。ところが人間は言葉を使う限り、この自らが作り出した論理を対象そのものの論理であるかのように見なししてしまう。これは言語のフェティシズムにもとづく言語名称目録観である。山元の言語観は恐らく言語名称目録観にとらわれており、したがって数と論理を言葉とはみなせなかったのだろう。実際、山元は「コトバは存在の住家である」というハイデッガーの言葉を受け入れている(『コトバの哲学』431頁)。山元によれば「認識とは、対象を強いて語らしめつつ対象と対話すること」(404頁)であり、「対象を認識することは、対象にまで技術的に客体化された自己の認識として、さらに対象を主体的に有意味化する主体の自

己認識として、自覚的な認識である」(405頁)とされる。対象がもつ論理のうち言葉が住むことが自覚的な認識だ、ということが語られており、この意味で理解された「論理」とは恐らく東洋思想に言う「空」や「無」のことなのだろう。

しかし人間は言葉を使うことではじめて対象を分節化することができるのである。ところが、言葉と指示対象との関係において、指示対象は個別的、具体的であるのに、言葉の方は他人に理解される、という意味で、社会的であり、一般的である。言葉を使うと、個別的、具体的なものに社会的、一般的な名称を付与する。この事態を別の側面からみよう。発話は意識の対象化である。発話によって個別的、具体的なものと社会的、一般的なものである対象化された意識との関係がつけられる。このとき、個別的、具体的なものが、社会的、一般的な対象化された意識の化身とされている。そうすると、対象化された意識としてある人間の論理が、個別的、具体的なもの自体に属するものであるかのように見える。

ヴィーコも言うように、対象が人間のつくったものなら、それは人間の身体の延長であり、従ってその論理は人間の論理と一致する。しかし対象が自然の場合、その対象に論理があると見るのは言葉を使うからで、実際は人間がつくった論理を対象におしつけている。

山元は対象に論理があると見、しかもそれを言葉を超えたものとみなすことで、言語のフェティシズムにそって、忠実にその言語観、対象に論理があり、言語はそれを受けとるだけ、という言語名称目録観を展開したのだった。

6) 認識と実践

横道にそれだが、武田の「論理」観にもどろう。武田が数と論理を言葉を超えたものと捉え、さらにそれを自然や社会の運動の衝動として理解しているとすれば「ことばが人間のすべてである」という見解や、革命は「一貫して言語革命として遂行される」といった主張の意味が明らかとなる。

武田にあっては革命とは、社会の運動の衝動となっている「内部コミュニケーションの自転運動」をやめさせることであり、そのためには自転運動の「内的論理」を言葉にすることが一切だ、ということになる。しかしこれは認識から実践という契機を除いてしまうことにはならないだろうか。論理を対象のうちにあるものとしてではなく、人間がつくったものとするのではなく、人間がつくったものを見ることではじめて、実践を認識論の中心に位置づけることができる。あれこれの闘いの論理が妥当であったかどうかは、実践を媒介とした認識によって決定されねばならない。そうではなく武田のように、言葉を超えた「論理」を言葉にすることから出発するならば、それは神

の摂理を啓示によって理解せよと要求することにならないか。これでは「武田は神格化しているという評判」(154頁)の根は深いと見なければならぬ。

実際、「内部コミュニケーションの自転運動」の「内的論理」を「言語規制」として、「自然規制」に対立させているが、これ自体、武田の空想上の産物であり、一つの教義にすぎないのではないだろうか。このことを現代の社会を素材にして証明してみよう。

7) 疎外=物象化の地平

武田は、「貨幣=資本は、第二次生産革命に始まる資本主義によって物神化されるのではなく、最初から物神として、資本主義を用意し、実現し、そして完成するのである」(313頁)と見ている。ここで武田が言っている「物神」とは、「最初に疎外された自転運動の内的論理、権力の自己意識としての権力のための権力の論理」(317頁)というものである。それは「経済の富の論理」とか「生産のための生産の論理」というように変容させられ、「それ自身のために」の論理としてまとめられている。

しかし、商品、貨幣、資本の物神性とは、このような論理ではない。人々の生産における一定の社会関係から生み出されてきた、私的諸労働の産物を社会的労働として通用させる形態が商品、貨幣の世界であるが、この人々の

交換という社会性が貨幣商品金という物そのものに生まれながらに属している力に見える、ということが、貨幣の物神性であった。そして、この物神性が何故もたらされるか、という事が根本問題なのである。

物神性は物象化の帰結であり、物象化に伴っている。商品、貨幣、資本にみられる物象化とは、物象の関係がもつ概念的な構造に人間が自らの意志を宿すことで物象に意志支配されることである。これは人が他人の意志を支配する政治的支配とは本質的に異なった支配の様式であり、自由と民主主義の政治体制の下で貫徹される餓えの規律にもとづく経済的支配である。

「ことばが人間のすべてである」とみなし、階級支配を「内部コミュニケーションの自転運動」として捉え、この自転運動の「内的論理」から「言語規制の自立」を見、そしてこの自立した「言語規制」を組み換えることを社会変革と位置づける武田にあって完全に欠落しているものは物質とそれが果たしている役割である。

さきに見たように真木悠介の外化、内化、疎外論は、労働と交換に限定され、物質的裏付けをもった議論が展開されていた。しかし「時間の内化」、「移動の内化」を主張する武田の外化、内化、疎外論には物質的裏づけがない。

実際、武田の疎外論には物質的裏づけがないので物象化論を含んでいない。労働の疎外とは、労働者と労働生

産物との関係を想定し、人間と物質との所有関係を問題にする限りで物象化論への道がひらかれる。ところが、武田は例えば「第一信号系から第二信号系が疎外され」とか「自然が人類を疎外し、身体が精神を疎外して」とかいった用法に見られるように、単に分化していくことを「疎外」という用語で表現している。もっとも分化過程で、分化されたものが分化したものを支配する、という意味をこめて「疎外」という用語が用いられているとはいえ、このような発想からは、疎外された労働から物象化論へとゆきつけない。というもののこの疎外論からは、対象化(=物質化)された労働が欠落しているからだ。

商品や貨幣や資本を、物神として捉えるだけでなく、それを対象化された労働と捉えることが決定的である。そして疎外された労働の根本は、対象化された労働としてある資本が、労働者を経済的に従属させているところにある。資本家はその際、蓄積された過去の労働としての資本の蓄積衝動が人格化したものである。そうすると「内部コミュニケーションの自立」ではなく、物象を媒介とする経済的関係のうちに支配・隷属の関係があることになる。人と人とのコミュニケーションは物象化によって意志支配されたコミュニケーションであり、「権力のための権力の論理」とはならない。したがって「言語規制」も自転運動をしはしな

い。労働者は資本のための剰余労働を提供する限りで働くことを許される、という餓えの規律がそこにあるだけである。

もちろん、国家と政治の領域では「権力のための権力の論理」は存在している。しかしそれはもはや資本家的生産という現代社会の生産様式の論理ではない。武田はこの権力の論理と共通するものとして、「生産のための生産の論理」をあげているが、しかしこれは使用価値の生産が価値の生産の手段となっていることがその内実であり、「それ自身のために」の論理とは微妙に異なっている。次章で見るように、恐らく武田はこのズレに気付いていたであろう。

第5章 グリーンコープ運動

第1節 新しい生活協同組合の発生

武田の思想の核心

武田はもともと文学者だったわけで、その思想は物語りという形式をとっている。しかも、その思想の核心に、「ことばが人間のすべてである」という考えと、「数と論理はことばではない」という言語観とがすえられ、しかも今日の社会に存在している支配様式を人類2000年の歴史にさかのぼって捉えようとする歴史観と、その支配様式のルーツをさらに宇宙と生命の誕生にさぐろうとする「進化」論にもと

づいて物語りを構成しようとしている。

武田がこのような物語りの語り部として自己を登場させざるをえないものがあるとすれば、恐らくそれは「内化の思想」にもとづく「言語革命」への希求であろう。数と論理はことばではないとすれば、内化の思想も言語では表現できず、言語も含めた人々の関係の革命が追求されることになり、言語の内化＝個人の無名化＝人間の共同化、を通し、そこに創出される集団言語が生活の場で運動化されることによって言語革命を体現した物語をつむぎ出していく。

それは、『伝習館・複数の母たち』に収められた座談会「疎外の遠さについて—柳下村塾託児所」での武田の次の発言で予告されていた。

「時間にはただ耐えるほかはない。時間が人間を貫いて空間化するとき、一部が観念化して時間軸Yとなり、一部が物質化して空間軸Xとなり、その間に生ずる函数関係の一部が自然に制度化していく。それを私たちは疎外—よそよそしく対立してくるものとして外化する—と呼んでおり、それは約百万年の前奏曲をへて、今から1万年前、人間が農業を発明したときから始まっている。希望とも絶望ともまったく無縁なところで、ひたすら生きることに耐え、どうすればこの疎外の自然過程をいくらかでも修正できるか、ただそのことを考え続けていくほかはない。」

(三一新書、289頁)

ところでこのような武田の思想を支えているものは第1章第4節でふれたように、人類の共同性意識としての〈故郷〉への期待である。「これが渴きとして人類に内化している」とみる武田は、人類史2000年の業火を人類史を見きること集中し、「市民社会の腐食部分を焼きつくして焦土によく人間連帯を回復」することを意図したのであった。

個人がどのような内的根拠をもって社会運動に参加し、かつそれを継続しているか、ということ自体は多様であり、それを人におしつけるとすれば、それは宗派を打立てることにしかならない。武田の場合物語りの語り部でありつつも、運動の現場にあつては卓越した政治家としての足跡を記録している。例えば遺稿集『共生』は、グリーンコープ会長としての挨拶集、グリーンコープ運営集、『共生の時代』への寄稿、それに個人論文の4種類の遺稿が収録されているが、それぞれがその場に対応した思想展開となっている。それぞれの場に応じた話が出来るといことは現実政治家としての優れた資質を示すものといえよう。

そこで最後にグリーンコープ運営集で語られた武田の思想を追い、武田の「革命的言語＝文体」を創出する闘いをあとづけよう。

地域のイメージ

グリーンコープ会長としての武田の思想的出発点は、託児所を足場に「共生クラブ生協やながわ」を設立したときの設立趣意書に書きとめられている。「自立・連合・共生の旗印」のものと「母親連合」、この運動は三つの観点から位置づけられていた。

一つ目は「子を生み育てる母親の運動」、二つ目は「あらゆる人間関係を問い直そう」とする流れの中に運動を位置づけること、三つ目は父性原理におちいりがちな生産至上主義の現われである加工食品中心の食構造そのものを反省し、地場の有機農業家と産業家との連帯を進める、というものだった。

一つ目の母親の運動と、三つ目の地場との連帯は「地域」としてイメージされてくる。「地方が行動において活性化する手がかりは野菜、地域、平和である」という立場から『大きく連帯する』を内実化するためには『小さく動く』が必要であり、『小さく動く』を保障するためにこそ『大きく連帯する』が必要である。その間の相関関係を理解し、『大きく連帯する』が着々と実現しつつある時、私達はそれに呼応して、野菜、地域、平和を手がかりに、そして『小さく動く』をモットーに、私達自身の行動を活性化しなければならないのか(『共生』114頁)と述べている。そして、地域については、現にいまある地域と、新しく創出していく第二地域とを区別し、次のように述べている。

「地域の鍵概念は一括された自然、生活、家族であり、家族の鍵概念は女、子供、である。共同購入運動は激しい盛り上がりを見せたが、部分的にしか地域の問題に迫っていない。しかも地域には、体制と資本が大規模に進出しつつある。今、生協には出口を求めるエネルギーが充満している。連帯、協同、共生の思想と第二地域の創出を目指して、女が質的に変わり、量的に拡大した生協運動を生協の内外に新たに展開すべき時期が来ていると感じる。ワーカーズがその新しい運動を切り開こうとしている。その願いの中に実在する地域の多様なイメージに期待したい。

……（中略）……

その際、ワーカーズに忘れてもらいたくないのは、生協運動と生協経営、生協外運動との構造的な関係、つまり前者が後者に支えられ、後者が前者に更に生かされていく関係である。常に前者は後者より熱く、後者は前者より冷たい。より熱いものは常により冷たいものに支えられ、より冷たいものは常に熱いものに更に生かされていく関係にある。」(126頁)

武田には後で見ると「生協は本来、地域の中に地域を創り出していく運動体である」(115頁)という考えがあった。第二地域をつくり出すことこそが、生協運動の大きな課題とされているのである。

人間の自然性と文化性

二つ目の人間関係の問い直し、については「学習会資料」で「男（上位疎外態）が女（下位疎外態）に向かって自己解体する」と述べられていたが、この内容は、1989年の段階になると「GC連帯の新しい列の組み方は自立と共生であってほしい」(139頁)とされ、次のように分業の組みかえとして具体化されている。

「後から出て来たものが自立する。先にあったものを征服したり侵害したりしない。できれば先にあったものに自己解体していく。同時に先にあったものが自立する。関係のレベルが上がる。皆んなが豊かになる。そのように分業を支配・差別、その根幹となる格差の列から自立・連帯・共生の列へ変えて行く。そういう分業間の列の組み方を私は『内化』と呼んでいる。」(140頁)

主として自然との関係で征服か共生かと問うことで、この「内化」について分業の列の組みかえとして具体化した武田は、ついでそれを文化の問題として展開している。

まず「自然としての人間の生命」が「文化としての人間の生命」に優位していることが確認され、次に双方ともが人間の生命活動という同次元に属することが確認される。ところが人間の文化性はある時点で一方的に自然性一般を対象化し、それそのものの本来の位置からはずれた次元へと転移させ

ることで、「自然としての人間の生命」の優位性がゆるがされるようになる。そして武田は「問題はしたがって、自然性一般の対象化の仕方、つまり征服か共生かにあります。人間の文化性は征服の場合、自然性一般の外部の異次元に、共生の場合、内部の異次元に転移します。」(147頁)と述べている。

人間関係の問いなおしや分業の列の組み換え、といった具体的な課題として提出されていた「内化」が、ここでは文化の問題へと一般化され、そうすることで文化革命の方法を導く内実へと到達している。

「人間の文化性は頑強に、文化性が対象化の『はたらき』として獲得した現実的な優位性が、自然性が本来もっている『存在』または『いとなみ』の優位性を損傷しないよう、純粋に論理的な対象化を文化性自身に要求すべきです。共生は自然と人間をいかに対象化するかの闘いですから。

人間の文化性は、その際、人間の自然性を自然性一般に開かれるように対象化する必要があります。」(147頁)

武田はここで、自然性が文化性に「論理的な優位性」を獲得し、後者は逆に前者に対して「現実的な優位性」を獲得するとみているが、論理はことばではない、という武田説をふまれば、ここで使われている「論理的」とは「本源的」という位の意味であろう。

ついでに武田は「疎外」や「対象化」という用語も、物質的裏づけなしに使

用するので単に産出される、という意味（但し、産出されるものが、よそよそしく対立するという場合）になっている。

さて、ここで武田が文化に要求している「純粋に論理的な対象化」とか「人間の自然性を自然性一般に開かれるように対象化する」といったことは、一つは自然の本源性を損傷しない文化のあり方であり、もう一つは例えば循環型社会のように、文化性対象化が自然一般に受け容れられる、ということだろう。

工業を農業に内化する

人間の自然性と文化性との関係についてのこのような把握は、当然にも「工業を農業に内化する」という課題に導く。武田にあってはこれは「外化→内化の道」であり、その内容は「①工業と農業のバランスを考える、②『ここまでおいでおいで』と制度も人間も上からあおらない、が二大原則です」(353頁)と1993年に述べている。というのも、「これから高度成長を経験する者には、外化→内化の道はいかにもまだるっこしい、きつい」(353頁)からだったが、しかし、今は「はっきり申し上げます」(353頁)。

「1960年の高度成長ですべては変わりました。変えたのは、第一に有害物質が合法的に拡散されている、という事実、第二に、地球資源は有限である。工業は農業に内化しなければならな

い、という考え方です。」(353-4頁)

このように述べたあと、武田は、岸本重陳、高坂正堯、岩井克人の著書の内容を紹介しつつ高度成長の過程をあとづけ、地域と職場の関係が戦前とは見事に逆転していることを確認したうえで、次のように述べている。

「この逆転を、よくやった自然過程と積極的に見ようが、今さらどうにもならない自然過程と消極的に見ようが、ともに外化→疎外の立場に立っていることに変わりはありません。まだ実現していない人間過程—再度申しますが、この人間過程という言葉は様々な使われ方をします—つまり人間の考え一つでこうもなりえた、今からでも遅くはない、がんばってほしい、と伝承的に考えるとすれば外化→内化の立場に立たざるを得ません。」(361頁)

「外化→内化の道」に立ち、工業を農業に内化することを目ざせば当然にもシステムの問題をさけては通れない。しかし分化による進化論は展開できるが、システム論については未展開である。げんに武田は「村岡常務へのお答え」のなかで、グリーンコープ宣言が「協同組合の発生」にふれられていないことを認め、それに言及するのは『男が工業を発明する』のずうっと後の方か、『グリーンコープ運動』を提唱する時か、とのどちらかにすべきでした(179頁)と述べている。

武田によれば、グリーンコープ宣言の全文の趣旨は「闘う相手は実は人類

の『進化』そのものである、生きるためには少なくともこれだけのことを解決しなければならない、いい加減にやれることではない、と言いたかった(178頁)のであり、「その原理をいかに噛み砕いて言うかに気を取られて個々の現象にまで気が回りませんでした(179頁)と率直に述べている。

武田の意識にあったのは、新しい生活協同組合運動としてのグリーンコープ運動の提唱にあたり、「その使命の困難さを理解してもらうだけの文章が書けない(179頁)ことで、「使命の困難さを上回るような文章はなおさら書けない、という絶望(179頁)があったと述べている。

ここから判明することは、武田が「協同組合の発生」の問題をグリーンコープ運動の使命を理解してもらうことよりも一層困難な問題と考えていた、ということである。

新しい生活協同組合の発生

今日の資本家的生産様式に代わりうる次世代のシステムについて考えようとすれば、商品や貨幣についての考察が不可欠である。

武田は「私がかねがね、貨幣は人間の経済活動の恐るべき疎外態である。それについて本格的な論及をマルクシズム側の学者に期待したい、つまり、マルクスの恐慌論は間違いではないか、とと思っていましたが、今年3月25日、岩井克人『貨幣論』(築摩書房)が

近代経済学の立場から出ました(358頁)と述べ、岩井の序文を紹介している。

武田が「マルクスの恐慌論は間違いである」と述べたことの意味は恐慌から資本主義の危機が到来するという予見は間違いだ、という意味であり、岩井が恐慌よりもハイパーインフレーションの方が危機だ、と述べている点を評価しているのであるが、同時に岩井がマルクスの価値形態論を読み直す必要があると述べている部分を肯定的に紹介している。

「協同組合の発生」について武田がグリーンコープ運動の使命の理解よりも一層困難な問題として捉えていた、ということについて、ここでその真意が計られるべきである。通俗的な協同組合論やレイドロウ報告など「協同組合の発生」について述べた文献は多数あるが、武田はそれらで展開されている内容について賛同しえなかったのではなかろうか。武田が追求しようとしたものは、この間存在してきた協同組合の「発生」ではなく、これから作り出すべき、「新しい生活協同組合」の「発生」の問題だったのでなかろうか。

とすれば「人間の経済活動の恐るべき疎外態」である貨幣とは何であり、それをどうするのか、という点の究明を欠いた協同組合論はシステム論としては失格だ、ということになる。

新しい産直運動

そこで最晩年の武田の思想を追ってみよう。1993年10月9日付の文書「平和と共生 東桂子さんに」には、工業を農業に内化していくイメージが次のように語られている。

「われわれの第三言語は、①農業と工業のバランスを考える、②農業は産業でよいか、③小中の農でいく、④新しい産直運動を展開する、です。④の産直運動を強化する必要があります。総員一日二時間の有償の農業労働が将来を見すえた産直の新しい課題となります。」(360頁)

ここでも言語から説きおこしているので、若干の解説を付しておこう。武田はここで人間の言語を第一言語、第二言語、第三言語に分類し、第一言語を農業と農業文化の言語、第二言語を工業と工業文化の言語、第三言語は双方の関係に関する言語とみなしている。そして今日の問題点を、本来第二言語が第一言語に、第一言語は生命に深く依拠しているにもかかわらず、第二言語が第三言語を侵略しているところに求めている。だから第三言語のレベルで自分たちの農業言語が発展し得る条件を守らねばならない、ということで、先の提案がなされているわけである。

そこでこの提案の内容を見てみると、全て、自然成長的な資本家的生産の発展に対する歯ドメとなっている。それは他ならぬ脱物象化された社会シ

システムの提案となっていないだろう。したがって問われているものは、タテの支配系をヨコの連帯系に組み換えた新たな分業をシステムとして組み立てることであろう。

第2節 グリーンコープ運動の展開

グリーンコープ運動の三つの原点

グリーンコープの使命が人類の「進化」そのものを闘いの相手とすることであり、このことを理解していくための原理の解明に集中したとされているグリーンコープ宣言の末尾にはグリーンコープ連帯の希いとして、三つの原点があげられている。

「①グリーンコープ連帯の究極の希いは地球上のすべてのいのちと自然・暮らしを守ることである。

②この希いを地域の運動として表現していく根拠は歴史的に女の自立である。

③女の自立は内外に平等にひらかれていなければならない。」(8頁)
グリーンコープ運動は、この三つの原点に立ち、「自然との共生、人間の共生、男女の共生という人類最後の課題をめざして」(9頁)スタートしたのであったが、この見地は実は、従来の協同組合運動の地平はいうまでもなく、労働運動や市民運動の地平をも超えたものとして提起されていた。

1985年8月に武田が福岡県生協連顧問と「新しい連帯のための特別委員

会」代表に就任し、以降2年余にわたり、たがわ生協問題の解決に力をつくし、そしてこの活動がグリーンコープ連帯結成への動きをつくり出していくが、この連帯をめざした武田の活動こそは、「新しい生活協同組合運動」としてのグリーンコープ運動を従来の協同組合主義や労働運動、市民運動との言論戦をとおして創出していく過程であったのではなかろうか。この見地から武田の活動を捉えかえしてみよう。

国家と社会との関係

たがわ生協問題の解決にむけて、それまでの対話をまとめた「連帯への記録」の思想的核心は市民運動としての生協運動と労働運動とが連帯しうる根拠を国家と社会の関係、及び上部構造と下部構造との関係の解明によってあとづけたことにある。

対立は、グリーンコープ連帯結成にむけ、福岡県での全県連帯を実現しようとする方向が、労働者にとっては経営による合理化攻勢であり、労働組合と労働者の権利に対する軽視を生みださざるをえない、とする意見によって形成されていた。これに対し、武田は回答の基調を「一般企業の業務統合＝合理化＝労組ねじふせに対して、県生協連独自の連帯＝業務統合＝活性化＝組合員・労働者の相互主体化を提唱してきたこと、今後もこの方針を堅持すること、生協運動はこの方針の堅持を可能ならしめる質を本来的に持っている

と考えていること」(81頁)というところにおき、この問題について、国家と社会との関係、上部構造と下部構造との関係についての新しい知見を示すことで解決しようとしている。

国家と社会の関係の問題には政治革命と社会革命の関係の問題が含まれていた。この点についての労働運動の側の伝統的な理解は、まず政治革命をなしとげ、労働者の国家を実現し、しかる後に社会革命にとりかかるべきだ、というものであった。従って、武田はこの伝統的な理解について「①対権力闘争の真の重要性と方法論からずれっ放しであったという意味で、生活者に対して常に背信的であったし、②またそれ自身の思想的な体質が闘争の総括性と上位性から権力の攻撃性と抑圧性に転移していた点で、生活者に対して常に圧制的なものを含んでいた」(85頁)というように経験的に退けているが、ここでは、それに代わるもう一つの理解が積極的に提出されているのである。

国家と社会の関係についての武田のもう一つの理解の原理は非常に簡単である。まず一般原理として、次の事柄が確認される。

「近代市民社会の成立によって実態的には同じ国家と社会が論理的に分離し、社会は国家からの相対的な自立と最終的な国家廃絶の契機をつかむと同時に、その国家廃絶のうらづけとなる社会の完全自立を実現するため、市場

原理に支配された利益社会の止揚とそれに前後する新たな人間解放、すなわち二次的共同社会の創造とそれを支持しうる人間のより高次の自立と連帯を次の課題として残した。」(82-3頁)と。

ここで提起されている事柄は、社会の完全自立を実現することによる国家の廃絶であり、そして、社会を自立させていくためには、市場原理に支配された利益社会を止揚すべく、新たな人間解放としてある二次的な共同社会の創造とそれを支えることのできる人間のより高次の自立と連帯の形成ということである。そして、これがグリーンコープ運動の目的に他ならなかった。

次にこの一般的な課題を実現していくために、「関係の構造と止揚の方法」が述べられている。そもそも国家は社会から疎外(生み出)され、社会は自然から疎外されたものだが、さらに次のような構造があるとされる。

「この国家の社会からの疎外はさらに、男の女からの疎外、人類の自然からの疎外、職場の地域からの疎外、工業の農業からの疎外、都市の農村からの疎外、文明の土着からの疎外、北半球の南半球からの疎外、その他の疎外関係、すなわち分業によって意識的・制度的に構造化されています。」(83-4頁)

ここで「疎外」という用語は武田独自の意味あい使われている。それは例えば「人類の自然からの疎外」とは、自然から生み出された人類が、自然に

対してよそよそしい関係に立ち、自然を支配している、という意味なのである。だからこれは、人類を生み出すことによる自然の自己疎外ということを表現しているのであろうし、他のものも同様であろう。つまり武田はここで社会の自己疎外、女の自己疎外、地域の自己疎外、農村の自己疎外、等々について語っていると見てよいであろう。このように捉えると、「こうして後から疎外されたものを漸次疎外したのに向かつて不可避免的に止揚解体していくのが人間にとっての唯一な、従って主体的な運動であると私達は考えています。」(84頁)という提起の意味も明確になってくる。

例えば、社会は国家を生み出す(疎外する)ことによって自己疎外におちいっているとみなすとすれば、後から疎外されたものである国家を疎外したものである社会に向かつて止揚解体していけば、社会は自己疎外から回復される、ということになるだろう。これを武田は「社会の自立と国家の廃絶」(84頁)というように表現している。

「しかし社会が国家から完全に自立するためには、その構成員である人間は、前述のように、男と女、人類と自然、職場と地域、工業と農業、都市と農村、文明と土着、北半球と南半球、その他の社会的な疎外の対関係を内在的に通過して、最終的に社会と自然との対関係をどう組み換えるかの問題に到達します。」(84頁)

武田の疎外論は、先に見た疎外したものの自己疎外という論理と同時に、疎外と関係を分業と捉える視点がある。したがって、社会の自己疎外からの回復を一たんは社会の自立というように原理的に想定したうえで、次には分業の組み換え、という実践的な課題が提起されてくる。

以上、労働組合的な、あるいは「政治主義」的な立場による社会変革論とは別のもう一つの社会変革論を見てきたが、ここでそれをまとめてみよう。

まず、社会的な人間(社会、国家、男性、女性等々)を生み出したもの(疎外したもの)と生み出されたもの(疎外されたもの)との対関係として捉える。社会と国家に関して言えば、社会が国家を疎外(生み出)している。ここに社会の自己疎外が成立しているが、社会を自己疎外から回復させるためには、疎外されたものを疎外したのに向かつて解体止揚すること、具体的には国家を社会に向かつて解体止揚していくことが必要である。そうすることで社会は自立し国家は廃絶される。ところでこの疎外関係は分業として、組織化され、制度化されている。従って解体止揚していくことは即この分業の組み換えということになる。この分業の組み換えこそが、今日の社会革命を実現していく方法である。およそそのような考えとして整理することができるのではなからうか。

上部構造と下部構造との関係

次に上部構造と下部構造との関係について。武田は、下部構造一元論を批判し、上部構造は下部構造に深く規定されながらも、それ自身に固有の論理で下部構造の動向を或る程度逆規定することを確認したうえで、次のように述べている。

「経済は自然との関係の上に成り立っていますから、社会構造としては下部に属する経済も、自然との関係では社会という上部構造に属し、もちろん固有の論理で動くと同時に、自然を下部構造として措定すること自体によって、上部構造をさらに上部と下部の二重構造に分化する契機を胚胎します。そしてこの上部と下部の二重構造をふくめて人間社会を『自然』の土部構造とせず、自然を『自然』の下部構造としなかった楽天的な人間中心主義が、マルクスはもちろん、その後のいかなるSF作家も予想しない公害を生み出したのでした。」(85-7頁)

国家の下部構造は経済であるが、しかし経済それ自体は自然に対しては国家とともに上部構造となっている、ということを確認したうえで、武田は人間のこころ(上部構造)の状態が身体(下部構造)に好影響を与えるホルモンを分泌するように、社会という上部構造が自然という下部構造に信号を発信できれば「もはや取り除くことができないと判明した分業であっても、それをタテの支配系からヨコの連帯系に

組み変えることが或いは可能となるかも知れない」(86頁)と述べている。

『『全県連帯』は県生協連関係者にとってそのような信号であってほしいという願いが私達にはあります。基底体制還元論は政治革命主義に短絡したり、社会革命を偽装したりしますが、私達は分業間のヨコの連帯系の核として、構造化され類別化された論理的な上下疎外態間の対関係に内在して、それが現実的にはタテの支配系として作用する基軸とどこまでも拮抗していきたくて考えています。』(86頁)

国家と社会との関係を論じたときに示された分業の組みかえが、自然を社会の下部構造と捉えることで、疎外関係としてある分業がタテの支配系として作用する基軸と拮抗していく視点がここで明らかにされている。

先にみたもう一つの社会変革論と、それを前提にして組み立てられた自然を社会の下部構造とみなす考え方にもとづき、武田はそれまでの生協運動の位置づけについて明らかにしている。それは、「生活者の生活条件に敵対的・抑圧的・破壊的なあらゆる体制とイデオロギーからの生活そのものの解放、すなわち社会の完全自立をめざす社会運動の一環として生協運動を位置づけ、生活の中で最も自然に近い『食とその周辺』を分担して、その領域で応分の努力を重ねて来ました。」(85頁)というもので、この努力のうえに今回の全県連帯を通し、「有志生協群の小

国家的な無益な競合状態を克服し、共に開かれた社会連帯の地平に立って、私達の現状と未来をもう少し大きな眼で見る視点を獲得したいと念願しております」(85頁)と述べている。

なお、この他「連帯への記録」には「生協と流通再編」「エネルギー革命—消費の大型化」「生協は女の運動」「大きく連帯して小さく動く」「生活と労働の真の豊かさ」「労働生産性と労働分配率」「疎外に耐える」「パート問題」「国鉄・組合・天皇制・家族」「企業防衛と国家防衛」「労働者と生活者」などの項目があるが、これらについては項目をあげておくだけにとどめよう。このあとさらに別の論文から、主として、「新しい生活協同組合」としての「グリーンコープ運動」について述べられている部分を追っていくことにしよう。

第3節 新しい協同組合論

新しい生活協同組合

武田が生協運動について、最も簡明に述べているのは「野菜、地域、平和について」の「地域について」である。それを全文引用しよう。

「①生協は本来、地域の中に地域を創り出していく運動体である。

②自然に存在する地域(第一地域・自然地域)は有害食品を氾濫させる現代社会の生産・流通・消費の構造が浸透している。

③その中に生協が創り出して行く地域(第二地域・生協地域・連帯地域・協同地域)は生協商品が充溢する新しい生産・流通・消費の構造を独自に内包している。

④第二地域は徐々に第一地域に取って代わるであろう。だからこそ第二地域は内外に開かれていなければならない。第二地域はあくまでも連帯と協同による自主的な地域住民の活動に基礎をおく。

⑤経営的にも共同購入が生協活動に占める比率は近々50パーセントにすぎなくなるという。そのように地域住民の欲求が変化していく。あとの50パーセントを埋めるのが私達の地域活動なのだ。

⑥私達の地域活動は、私達にしかできない、私達の側からの、すなわち連帯と協同による仕出し屋、べんとう屋、レストラン、リサイクル工場、子どもセンター、託児所、医療相談室、診療所、その他もろもろである。」(115-6頁)

生協を地域をつくり出していく運動体と見るのは、それを生協運動として捉えるものだった。これに対して狭義の生協は武田によれば生協の経営である。この経営と運動とをより高い次元で結びつけたものが広義の生協であり広義の生協には広義の経営が対応している。

そこで狭義の生協経営は地域ではない、という結論が出てくる。それはこ

れを否定的に捉えていることを意味せず、むしろ狭義の経営は地域や運動には中立でチャンと業務を遂行するという意味だという。

ここから第一に「狭義の生協経営が越え、越えられるのは、ただ運動によってのみである。私達はこの事実を『生協運動は、生協を貫き、生協を越える』と表現してきた。広義の生協は、狭義の生協が地域に内在し得るように経営されねばならない。」(125頁)という見解が導かれてくる。

第二に、理事会の役割の重視である。というのも以下に述べられているように、広義の生協と生協運動のリーダーが理事会とされているからである。

「理事会は国内外の状況を的確に見透し、的確に対応し、新しい地域運動を創り出し得る『強力な主体』として生協を形成し、組合員に精神的・物質的な受益者意識を、職員に職場と雇用の安定を不断に保証し続けねばならない。」(119頁)

この理事会に対する位置づけは、通常の生協の理事会には荷が重い。しかし、グリーンコープはワーカーズコレクティブとしての理事会事務局を創り出すことで、理事会がこの重い荷物を担える条件づくりをしている。

自立と共生

次に武田が意図している生協運動を思想面から見てみよう。まず現実の社

会運動にとり組む際に政治的リアリズムが不可避的に要請される。運動の原理としては、もう一つの社会変革論として疎外されたものを疎外したものに向かって解体止揚することを提起し、その実践的課題としては分業をタテの支配系からヨコの連帯系へ組み変えることがあげられた。そのうえにたつて、政治的リアリズムを導く政治思想が、プラス面とマイナス面の関係の問題として展開されている。

「①どんなプラス面にも必ずマイナス面が伴う、②生きるためには現実には何かを捨てねばならない、③しかしその一見捨てたかに見える対立物のプラス面を後生大事に育てていく観念の運動がないと折角のものも結局つぶれる、④自然は苛酷である、⑤観念は観念、今はともかく有機農業の末端につながる、というDNAの二重螺旋みたいな哲理を生き抜くのも一生かなと覚悟させられています。」(347頁)

「どんなプラスのものにも必ずマイナス面が付きまといます。そのプラス面とマイナス面の対立を不断にレベル・アップして行くのが我々の『運動』ではないでしょうか。」(191頁)

この政治的リアリズムをふまえ、グリーンコープ連帯の思想は自立と共生におかれている。

「GC連帯の新しい列の組み方は自立と共生であってほしい。

①人間の自立、自然の自立、人間と自然の共生

人間が自立しなければ自然は自立しない。自立し合った者同士の連帯でなければ共生にはならない。自然との調和を誇っていた日本人がいま自然の最大の破壊者になっている。自然との列の組み方を『征服』から『共生』へ変えたい。

そのためには社会の下部構造に自然を加え、下部構造をそれぞれ自立した自然と経済の二重構造ととらえ直すくらいの観念の運動がほしい。

②女の自立、男女の共生、人間の共生
人間と自然が共生の列を組むためには、人間同士が共生の列を組まねばならない。

自立とは消去法で言えば他者を征服したり侵害したりしないこと。

人間が自然を征服し侵害するなら、その征服と侵害の論理は必ず人間自身にはねかえる。

人間同士の共生が実現するためには、キープポイントとして男女の共生が実現していなければならない。男が女を支配し侵害するのは一切のために良くない。

男女の共生はそれぞれ自立し合った男女の連帯でなければならない。女は男から自立する。

③地域の自立、南北の共生

女が男から自立するためには地域が職場から自立しなければならない。…… (中略) ……

後から出来たものが自立する。先にあったものを征服したり侵害したり

しない。できれば先にあったものに自己解体していく。同時に先にあったものが自立する。関係のレベルが上がる。皆んなが豊かになる。そのように分業を支配・差別、その根幹となる格差の列から、自立・連帯・共生の列へ変えて行く。そういう分業間の列の組み方を私は『内化』と呼んでいる。」(139-140頁)

ここでは「内化の思想」が、分業間の列の組み方というように具体化されている。

媒介、連帯の関係の持ち方

このように自立と共生の思想をもとに連帯の列を組もうとすると、「指導」か「媒介」か、という問題が出てくる。というのも、連帯とは関係の持ち方に他ならないからである。この問題について武田は媒介を重要視している。

「そのような絶えず柔かく止揚され決して一方に硬直することのない関係の維持と発展の原動力を我々は『連帯』と表現して来た。

○ 両者は相互に浸透し合うものであるから、その相互に浸透し合うことが相互の関係をレベルアップするように両者を『媒介』すること、『指導』はその『媒介』が真剣で本物であるなら自然にその中に含まれてくると考えてよい。

○ 人は指導しようとして指導しきれるものではない。状況との対決を常

に念願に置いて、資質と資質、思想と思想との聡明な出会いを媒介すること、その際状況、資質、思想についてそれぞれ明示する必要があるれば、その明示がやや指導に近い。

○ 媒介の方が指導より観念が大きい。

○ 魯迅の塹壕戦の論理は『時に髪を振り乱して闘う』ことを否定していない。どんな時に髪を振り乱すのか、魯迅は何も語っていないが、媒介か指導かの論議など無用の一瞬があることを忘れずにいたい。」(133頁)

指導の場合、指導・被指導関係が前提にされるが媒介の場合は、媒介者は媒介したあとには関係から消え去っている。この意味で連帯の関係には媒介がふさわしい。

連帯を獲得していく方法

さらに連帯を獲得していく方法について武田は次のように述べている。

「連帯の基本は一度、二度、三度と関係のレベルアップに応じて何度も自他を相対化し得ること、そして、共々に共通の絶対を或いは発見し、或いは創出して、共々にそれに接近しようと試みることである。

○ 自他を相対化するためには自他を相対化し得る言葉を持たねばならない。

○ 言葉はついにとぎれるものであること、その時は他の言葉に託して静

かに退場することを予め覚悟しておかねばならない。

○ 自分だけいち早く絶対に達したと錯覚し、そこから他を指導しようとしたり、そこで高見の見物を極め込んだりしてはならない。

○ 第一に、我々の言葉が仮りに絶対に達したとしても、それは我々の身体に制限される。

○ 第二に、現実には膨大であり、どんな言葉も一元的にこれを表現することはできない。

○ もちろん、自立と連帯は不可分である。自立の根拠となる言葉はしつように探し出されねばならない。ただ連帯のコトバの方が自立のコトバより大きい。

○ たんに自分の自立のコトバを他に注入しようなどと考えるな。それぞれが自立の言葉に至る可能性を持った存在であると考えよ。自他の自立に援助し、時に打撃することもあるのが連帯のコトバだ。

○ 以下、具体的には次の順序をたどる。

① まだ極めて不十分なものであるが、まず連帯のコトバによって他のすべてを丸ごと所有する。ヤボな価値判断なんか一切しない。

② 次ぎにいくぶん塑成しかけていく自分の自立のコトバによって、いったん所有したものをきびしく拒絶する。

③ 拒絶すると同時にもう一度所有

する。何度も何度も同一物に対して所有と拒絶をくり返す。

④ 連帯のコトバと自立のコトバが共に鍛えられる。共に絶対に近づく。関係のレベルが上がる。」(133-4頁)

これは媒介を軸とした連帯の關係のとり方について整理したものであるが、連帯を獲得していく方法についてここまで整理したことは、連帯の意志の背後に多くの紛争と対立、論争があったことをうかがわせる。

実際生協の認可単位に1つの生協をつくり、それが連合していった生活クラブとちがい、グリーンコープは例えば福岡県に見られるように多くの色あいの異なる生協が、エフ・コープへの対応と労働組合問題をかかえながら連帯していった。その連帯の過程に多大のエネルギーがそそぎ込まれている。その帰結として、連帯の方法についての詳細な内容が示されているのであろう。

専従職員論

あと新しい生協運動のイメージを示すものとして見落とせないものに、専従職員論がある。

「○ 共生社が専従に、ともかく賃労働に専念せよ、とお願いしたのは、次の三つの理由からだと考えられます。

① 運動を第一義、配送は第二義と考え、配達に運動を支えている事実

に無頓着な労働者が多かった。

② 一般公募で運動への参加を期待するのは非礼であり、条件づけるのは以ての外、という考えがあった。

③ 労働者は労働者本来の権利(労働条件の改善に努める)と義務(職務をきちんとやり抜く)に目覚めてほしい、と要請することで両者を統一したいと思った。

○ GC連合では次のように整理しています。

① 先ず観念的に一体不可分のものとしてとらえられた広義の経営と広義の運動がある。生協は企業体でもあれば運動体でもある。赤字のたれ流しは企業の倒産、運動の廃滅を同時に意味する。

② 狭義の経営と狭義の運動が相互に作用しつつこれを支える。『狭義の』とは『実際に、或るいは、具体的に行われる』というほどの意である。

③ 狭義の経営は一切の経営事務と物質の配送を含む。直接には専従が担う。狭義の運動は直接には組合員が担う。

○ GC連合は次のように専従をお願いします。

① 専従は先ず、賃労働者としての自分の仕事、主に配送と配送事務の仕事、それ自体としてきちんとやり抜くか、やり抜けるような条件整備に努力されたい。それが狭義の経営の基礎であり、狭義の運動と作用

し合って、広義の経営と広義の運動を支える。GC連合はこれを支持する。

② 専従は次に、生協企業体の『労働者』と生協運動体の『市民』とが自分の中で対立するのをとおして、自分の労働の質を対象化し、できれば両者の対立を止揚されたい。賃労働は一般的な労働の質を言うのであって、自分の労働の質を対象化する『コトバ』ではない。そういう『コトバ』を持っているのは労働者ではなくて市民である。

③ 専従は更に、完全な一人の市民に帰った時、グリーンコープ運動の質を純粋に対象化できるはずであり、その際、たとえば『グリーンコープ連帯の新しい列の組み方』の意図なり考えなりを共有してはいただけまいか。専従の中の『賃労働者』がテーゼ(正)、『市民』がアンチテーゼ(反)となって、市民の場合は、もちろん『市民』がテーゼ、『賃労働者』がアンチテーゼとなって、『グリーンコープ連帯の新しい列の組み方』のジンテーゼ(合)に進んで行く。これは私ひとりの夢想であろうか。」(140-2頁)

専従職員論も媒介の観点から立てられている。武田は職員が媒介者として自己の内に対立を止揚することを期待している。

媒介の主体

別のところでは武田は、「生協が本来内包している運動と経営の矛盾を双方から論理的に止揚し得る方法を考え出してほしい」(132頁)という観点から「先ず経営=『個人からの超越性』(普遍性)が運動=『個人の自発性』(恣意性)を生かし得る=『媒介し得る』ように自己疎外してほしい。そうして始めて『逆もまた真なり』とまっすぐに言うことができる。何より経営の側の自己確認が論理的には前提であり、先決である」(132頁)と述べている。

これは「運営に関する覚え書的提言」という文書で述べられたものであるが、この文書は生協の運動体という側面と組織、経営体であるという側面についてそれぞれ考察したうえで双方の矛盾の止揚を経営の側の自己確認に求めたものである。

その際、運動体は個々の個人の自発性に近づくものとみなされ、組織体、経営体は個人からの超越性を内包しているものとみなされている。この個人からの超越性という場に、現実的には等身大でしかない自分を論理と観念の次元で越えることで対応する。これが経営に課せられた課題であった。ここから次の任務設定が出てくる。

「一つ、グリーンコープは或る計画の統括主義的徹底を参加者に強要しない。むしろ参加者の意志を一つの計画に媒介したい、二つ、媒介の主体は常勤常務理事会である。」(135頁)

これは筋論としてはその通りだが、たえずあやうさがつきまとう。連合形成過程で、理事長会がおかれていたが、その理事長会の位置について武田は次のように述べていた。

「理事長会を機関にしなかったのは、①理事会との関係を考慮した(組織としては理事会が最高機関である)。②しかし組合員はあらゆるエネルギーの源泉、ガイア、大地である。ガイアはあらゆる機関をこえている。③その直接の代表である理事長会が機関であってはならなかった、等の事情によります。」(153頁)

このあやうさは、理事長がガイアとしての組合員を代表できるか、という問題のあやうさでもある。もっともこの点は武田にも十分わかっていたことだろう。「膨大なエネルギーに対してハイアラキーと独裁の非難だけはグリーンコープとして是非とも避けねばならない」(152-3頁)と述べられていることからそれは明白である。恐らく組織面での新しい発展が要求されているという予感があるのだろう。

「『GCは遠くなった』という声がタコのように耳にこびりついています。たしかに権力として延びた面がありますが縮まった面もあります。その縮まった面での成果がまだ実感されていないのでしょうか。我々の一層の努力が肝要です。権力として自立することの度合いは媒介の責任をとることの度合いと正比例します。丁寧に丁寧にやり

たいものです。集中と排除の問題、分権と集権の問題、その他、一步誤れば組織の命取りになりかねない問題が私たちの前に山積しています。」(207頁)

媒介の主体にとって媒介が無用となる事態こそが自己実現に他ならない。「媒介の責任をとること」を媒介を無用とする条件の形成としてつくりあげていくことははたして可能だろうか。

『社会システム研究』創刊号について

かねて準備中であった社会システム研究所紀要『社会システム研究』創刊号が6月15日に発刊されます。目次は次の通りです。

社会システム研究所の発足	三宅崇昭
総論：次世代のシステムを求めて	
（システム論）持続可能なシステム	三宅崇昭
（思想論）文化知の提案	境 毅
（国民経済論）あえて選ぶ中流国・中進国への道	千田智之
（環境論）地球環境問題の原点と現状の基本問題	小林圭二
各論：生命系のシステム	
（農業）農の21世紀システム	田中正治
（教育）「子ども」という現在	岡田盾夫
（家族）家族と世代	西嶋 彰
定例研究会より	
地力について 1997. 4. 23	(故) 福富正実
サパティスタとの連帯 1998. 11. 19	崎山政毅

発行は社会システム研究所で、A4版170頁、定価は2,500円+税です。力作ぞろいですので、購買をお勧めします。購読申込は郵便振替で代金をお送り下さい。送料当方負担、税は不要です。

郵便振替口座名 社会システム研究所
口座番号 01040-7-33939

今回振替用紙を同封しておきますので、ご注文の際には御利用下さい。

